仙台市文化財報告書第196集

南小泉遺跡

第25次調査報告書

1995年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財報告書第196集

南小泉遺跡

第25次調査報告書

1995年3月

仙台市教育委員会

序

日頃より当市の文化財保護行政に多大のご協力を賜り、まことに感謝にたえません。

南小泉遺跡は昭和14・15年（1939・1940）の霞目飛行場の拡張工事の際に大量の弥生土器・古墳時代の土器が発見されて以来、仙台を代表する遺跡の一つとして著名であります。

本格的な発掘調査は昭和52年（1977）より実施され、近年の活発な開発に伴い調査次数を重ね、中世の大規模な屋敷跡の発見等多くの成果をあげております。

今回の25次調査では市の施設建設に伴い、遺跡のほぼ中央部で、古墳時代中期、5世紀頃の集落跡の一角を調査致しました。出土遺物では多数の石製模造品が注目されます。

これらの調査成果は、仙台の歴史の解明のみならず文献では知ることのできない古墳時代の人々の暮らしを探る上でまことに貴重なものであり、生涯学習や学校教育にも積極的に活かしていく所存であります。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にご指導、ご協力くださいました皆様に心より感謝申しあげます。

平成7年3月

仙台市教育委員会

教育長　坪山　繁

例　　言

1．本書は、遠見塚コミュニティーセンター、老人福祉施設、児童館、南小泉保育所等の建設に伴う南小泉遺跡第25次調査の本報告書である。
2．本書の遺物整理・執筆・編集は、文化財課職員と協議しながら、五十嵐康洋が行った。
3．本書を作成するにあたって次のように分担を行った。

本文執筆	五十嵐
遺構写真撮影	渡部　五十嵐
遺構図面整理、トレース	渡部　五十嵐　菅井民子　山田やす子
遺物復元	山田
遺物実測、トレース	五十嵐　青山諒子　米倉節子　太田君子　植野幸子　菅井滑子　森みほ子
遺物写真撮影	五十嵐
図版組み	五十嵐　青山　菅井(民)　山田　米倉　森

4．石製模造品・石器の材質鑑定は、東北大学　蟹沢　聰志氏にお願いした。
5．火山灰分析は古環境研究所に依頼した。
6．本調査の資料は、仙台市教育委員会で一括管理している。
7．巻末に第24次調査の遺物実測図を掲載しているが、これは年報15で調査要項を既に報告しているものである。

凡　　例

1．本書で使用した地図は、国土地理院作成の1：25,000「仙台東北部」である。
2．図中及び本文中の方向の「北」は真北である。調査区基準線北は、真北より12°12′22.86″東偏している。
3．調査区のグリット軸は、任意のものであるが、その後の測量により平面直角座標系Xによる国家座標に位置づけている。
4．層位名は、基本層位をローマ数字、遺構内堆積土については算用数字で表し、その中でも細分されるものには、アルファベットの小文字を付している。
5．本書で使用した遺構略号は次の通りである。
SI：竪穴住居跡、竪穴状遺構　SD：遺構　SK：土坑　SE：井戸跡　P：ピット、小柱穴
6．竪穴住居内のスクリーントーンは、焼面の範囲を示している。
7．本書に示した土色については、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1976) を使用した。
8．各遺構ごとの遺物点数には、破片の点数も含んでいる。
9．遺物の登録に関して使用した遺物略号は次の通りである。
B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ）　D：土師器（ロクロ使用）　E：須恵器　K：石器、石製品
I：陶器　J：磁器　P：土製品
10．遺物実測図中で中心線が一点破線のものは破片実測である。
11．土器観察表中の（　）内の数値は推定値である。
12．土師器の内面調整で黒色処理のものはスクリーントーンで示してある。
13．図示した遺物の観察表は巻末に一括してある。特に区名のないものは全て南区で出土している。

本 文 目 次

序文
凡例
Ⅰ．調査に至る経緯と調査要項……1
　1．調査に至る経緯……1
　2．調査要項……1
Ⅱ．遺跡の位置と環境……2
Ⅲ．調査の方法と概要……2
Ⅳ．基本層序……9
Ⅴ．検出された遺構と遺物……9
　1．検出遺構
　住居跡……9　溝跡……19　小溝状遺構群……35　土坑……35　井戸跡……38
　ピット……39　E76グリットチップ集中箇所……40　東区の調査……40　北Ｂ区の調査……41
　2．その他の出土遺物……42
Ⅵ．火山灰分析……48
Ⅶ．考察……51
　1．遺物について……51
　2．遺構について……53
　3．まとめ……54

挿 図 目 次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡……3
第2図　調査区配置図……4
第3図　実測基準線……4
第4図　調査区平面図……5
第5図　南区基本層序・模式図……7
第6図　北区平面図・基本層序……8
第7図　SI 1住居跡平面図・断面図……10
第8図　SI 1出土遺物……11
第9図　SI 2住居跡平面図・断面図……11
第10図　SI 2出土遺物……12
第11図　SI 3住居跡平面図・断面図……13
第12図　SI 3出土遺物……14
第13図　SI 4住居跡平面図・断面図……14
第14図　SI 4出土遺物……15
第15図　SI 5住居跡平面図・断面図……16
第16図　SI 5出土遺物……17
第17図　SI 6住居跡平面図・断面図……18
第18図　SI 6出土遺物……18
第19図　SI 7竪穴状遺構平面図・断面図……19
第20図　SI 7出土遺物……19
第21図　SD 1・2溝跡平面図・断面図……20
第22図　SD 3・4溝跡平面図・断面図……21
第23図　SD 5溝跡平面図・断面図……22
第24図　SD17溝跡平面図・断面図……23
第25図　溝跡平面図・断面図（SD 3・4・7・9・10・11・16・18）……25
第26図　溝跡出土遺物①……27
第27図　溝跡出土遺物②（SD 5）……28
第28図　溝跡出土遺物③（SD 5）……29
第29図　溝跡出土遺物④（SD 5）……30

第30図　溝跡出土遺物⑤（SD 5）……31
第31図　溝跡出土遺物⑥（SD17）……32
第32図　溝跡出土遺物⑦（SD17）……33
第33図　小溝状遺構群平面図・断面図……34
第34図　小溝状遺構出土遺物……35
第35図　土坑出土遺物……36
第36図　土坑平面図・断面図（SK 2～13）……37
第37図　井戸跡平面図・断面図（SE 1・2）……39
第38図　ピット配置図……40
第39図　東区検出遺構平面図・断面図……41
第40図　北B区検出遺構平面図・断面図……41
第41図　E76グリットチップ集中箇所平面図……42
第42図　基本層出土遺物……42
第43図　各地区出土遺物（弥生土器）……43
第44図　各地区出土遺物（弥生土器）……44
第45図　各地区出土遺物（石器・石製品）……45
第46図　各地区出土遺物（石器）……46
第47図　第24次調査出土遺物……47
第48図　土師器分類図……52

写真図版

写真図版1　検出遺構1
写真図版2　検出遺構2
写真図版3　検出遺構3
写真図版4　検出遺構4
写真図版5　土師器①
写真図版6　土師器②
写真図版7　土師器③
写真図版8　土師器④
写真図版9　土師器⑤・須恵器・弥生土器①
写真図版10　弥生土器②・土製品・石製品①
写真図版11　石器・石製品②
写真図版12　石器・石製品③
写真図版13　第24次調査出土遺物

表目次

第1表　南区ピット集計表
第2表　北区ピット集計表
第3表　遺構別出土数量表
第4表　主な遺構毎の各器種・各類の出土数
第5表　遺物観察表①
第6表　遺物観察表②
第7表　遺物観察表③
第8表　遺物観察表④
第9表　遺物観察表⑤
第10表　遺物観察表⑥

Ⅰ　調査に至る経緯と調査要項

1　調査に至る経緯

平成５年度に仙台市若林区遠見塚１丁目において、公共施設の建設が計画された。仙台市市民局区制部振興課、民政局社会福祉部高齢福祉課、児童福祉部児童家庭課、児童福祉部保育課により、それぞれ遠見塚コミュニティーセンター、老人福祉施設、児童館、南小泉保育所が建設される計画である。建設予定箇所は南小泉遺跡にあたるため、関係各課と文化財課との間で遺跡保存に向けての協議が進められ、遺構の破壊が免れない敷地内の道路と防火水槽部分について、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

2　調査要項

遺　跡　名　　南小泉遺跡（宮城県登録番号01021　仙台市登録番号Ｃ－102）

所　在　地　　仙台市若林区遠見塚１丁目22番地５他

調査主体　　仙台市教育委員会

調査担当　　仙台市教育委員会文化財課調査第一係

主任　篠原信彦　教諭　五十嵐康洋　主事　渡部　紀

調査面積　　約1,000㎡

調査期間　　平成６年４月13日～７月20日

調査参加者　（野外調査）芦野徳松　芦野ヒデ子　安藤繁　板橋祝子　板橋令子　遠藤清子　大泉勇　大宮みよ子　奥田美津子　角田紀隆　黒瀬クラコ　酒井正雄　佐藤良次　佐藤愛子　佐藤よし子　佐藤すみ子　佐藤ゆう子　佐藤リキ子　柴田明　菅原晶子　田中スエ　堀江幸雄　三浦市子　鈴木芳子　伊藤晋也　川田哲夫

（整理作業）青山諒子　菅井民子　山口やす子　米倉節子　太田君子　槇野幸子　菅井清子　森みほ子　鈴木由美

II　遺跡の位置と環境

南小泉遺跡は仙台市若林区に位置し、広瀬川北岸に形成された自然堤防上に広がる。遺跡の範囲は遠見塚古墳を中心に、南小泉、古城、遠見塚地区の東西約２km、南北約１kmの135haあまりの広大な面積を有している。近年、宅地化が急速に進み遺跡の景観が変貌してきている。

南小泉遺跡が広く認識されたのは、昭和14年から16年にかけての篭の目飛行場拡張工事に際し、弥生時代から古墳時代の多くの遺構・遺物が発見されたのが契機となっている。特に古墳時代中期の土師器の標識遺跡として知られることとなり、東北地方の土師器研究に与えた影響は大きいものがある。しかし、その後は調査されることなく本格的な調査が開始されたのは、昭和52年から当教育委員会によってであり、今年度で25次を数える発掘調査が実施されている。本報告書はそのうちの第25次調査についての報告である。

これまでの各調査で検出された遺構・遺物は縄文時代から近世に至るものがあり、縄文時代の遺物は17次調査で初めて縄文時代後期の遺物が出土している。また、第19次調査においては縄文時代晩期の遺物包含層が確認されたが、しかし、どちらも遺構の検出は見られず、今後の発見が期待されている。弥生時代の遺物は比較的多くの調査で出土しているが、遺構は第12次調査で溝跡が一条検出されているのみである。古墳時代以降は時期的な差異はあるものの、多くの調査で成果が上がっている。住居や掘立柱建物跡、畠の耕作痕跡ではないかと考えられている小溝状遺構などが検出されている。また、中世の城館跡や江戸時代には若林城が築かれ城下町が形成されることとなり、これに伴う遺構も検出されている。また、周辺の低湿地には弥生時代の水田跡などが見つかっている中在家南遺跡、高田Ｂ遺跡や官衙跡として知られている郡山遺跡、陸奥国分寺跡、国文尼寺跡などがある。

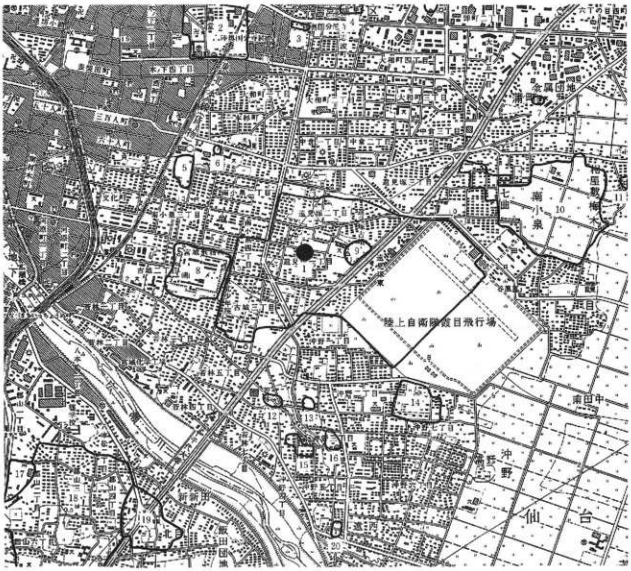
このように南小泉遺跡は自然堤防上に位置するという利点を生かし周辺の低湿地に見られる遺跡群とも関連をもちながら、縄文時代から現代まで人々の生活の場となってきている。

III　調査の方法と概要

調査区は施設内道路と防火水槽の大きさに合わせて設定した。現耕作土の下に天地返し土が厚く存在していたため、これらを重機で除去し、天地返し直下の層での遺構の検出に努めた。東側の道路拡張部分は狭いうえに遺構検出面まで深いため、部分的に調査区を設定した。測量基準線は調査区の方向に合わせて設定し、後に基準点測量を委託し、国土座標に位置付けた。点Ａの座標は、Ｘ＝－195960.133，Ｙ＝7029.637，点ＢはＸ＝－195941.155，Ｙ＝6941.701であり、調査区基準線北は、真北より12°12′22.86″東偏している。（第２図）

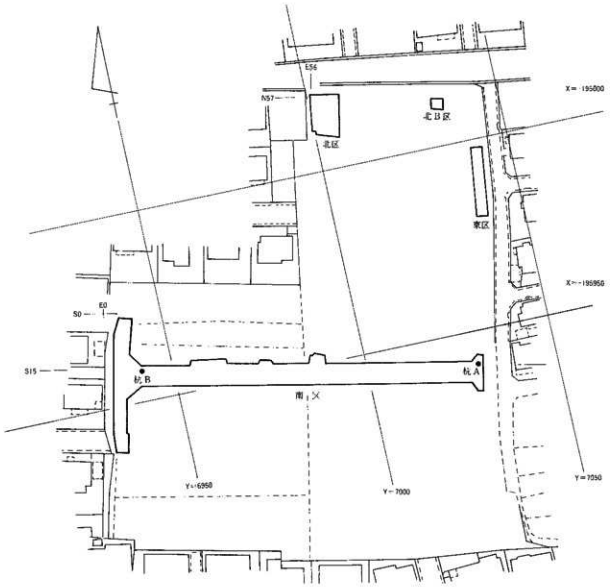
調査区の名称は、道路部分を南区、防火水槽部分を北区、市道拡張部分を東区とした。調査基準点は北西隅に設置し、そこから１ｍごとにＥ１，Ｓ２，などと番号をふった。東に６ｍ行くごとに１グリットとし、西端のラインをグリッド名とした（E10からE16まではE10グリッドと呼ぶ）。（第３図）

重機による表土除去は４月13Ｈより開始した。４月20日より作業員を加えての精査を開始し、住居跡、溝、土坑等の遺構が検出され、調査を行った。６月より住居跡の調査も開始した。６月下旬からは遺構検出面より下層の調査も並行して行い、７月20日をもって野外調査を終了した。遺物の水洗等の基礎整理は、一部は野外調査と並行して行っていたが、９月以降本格的に開始し、11月下旬より報告書作成の作業を行った。

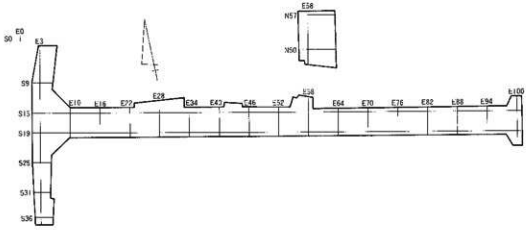


No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	南小泉遺跡	集落跡	自然堤防及氾濫原	縄文～近世	11	中在家遺跡	集落跡	沖積地	平安
2	陸奥国分寺跡	寺院	沖積地	奈良・平安	12	砂押Ⅰ遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
3	陸奥国分尼寺跡	寺院	沖積地	奈良・平安	13	神柵遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
4	志波遺跡	集落跡	沖積地	奈良・平安	14	沖野城跡	城館	自然堤防	中世
5	表杉岡遺跡	集落跡	沖積地	平安	15	砂押Ⅱ遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
6	洗釜塚古墳	古墳	沖積地	古墳	16	中柵西遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
7	曽根松明神古墳	円墳？	沖積平野	古墳	17	西台畑遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳
8	若林城跡	城館	沖積地	戦国～江戸	18	那山遺跡	官衙	自然堤防	古墳・奈良
9	遠見塚古墳	古墳	沖積地	古墳	19	北目城跡	城館	自然堤防	室町・江戸
10	仙台東郊条里跡	条里遺構	沖積地	奈良・平安	20	河原遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安

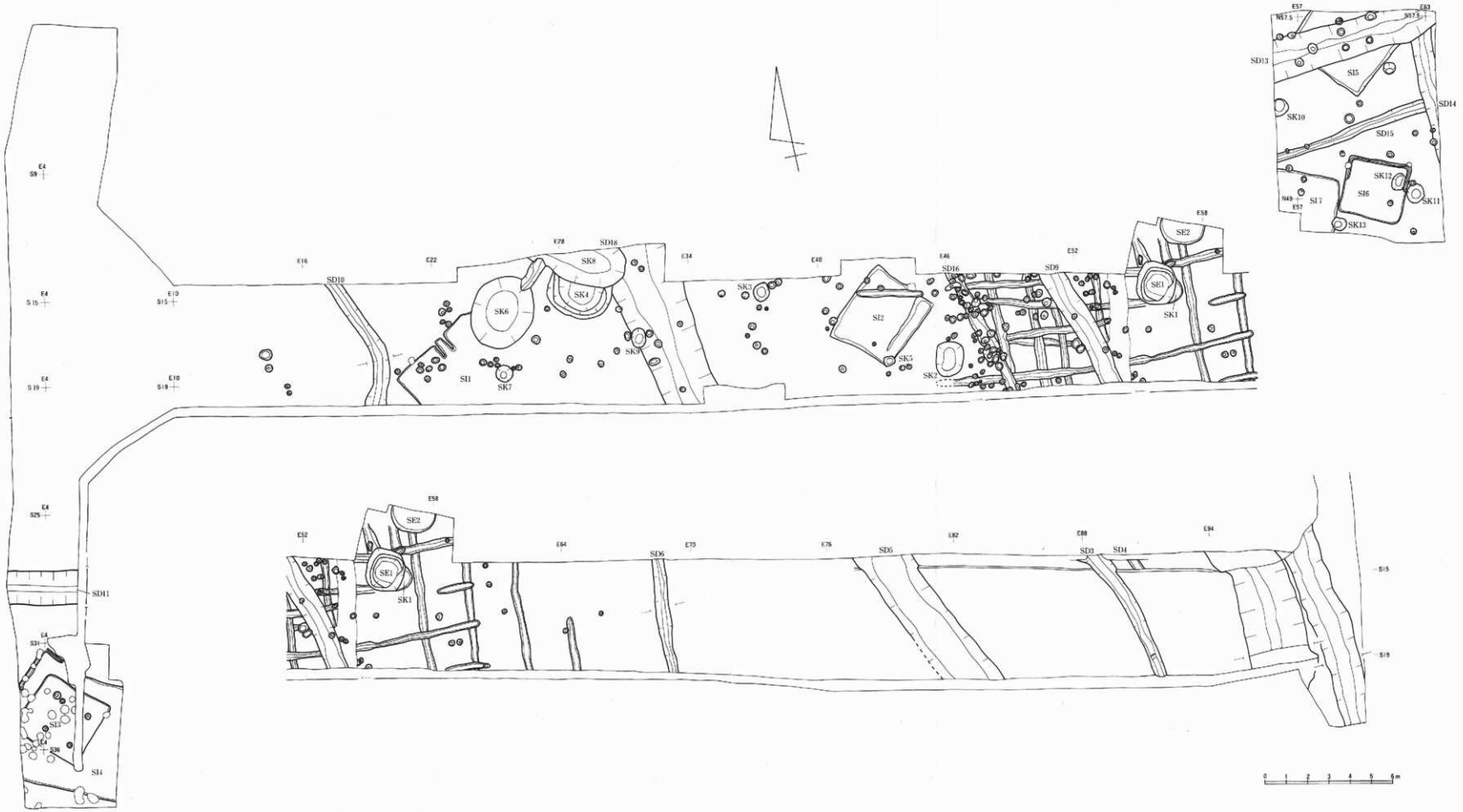
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



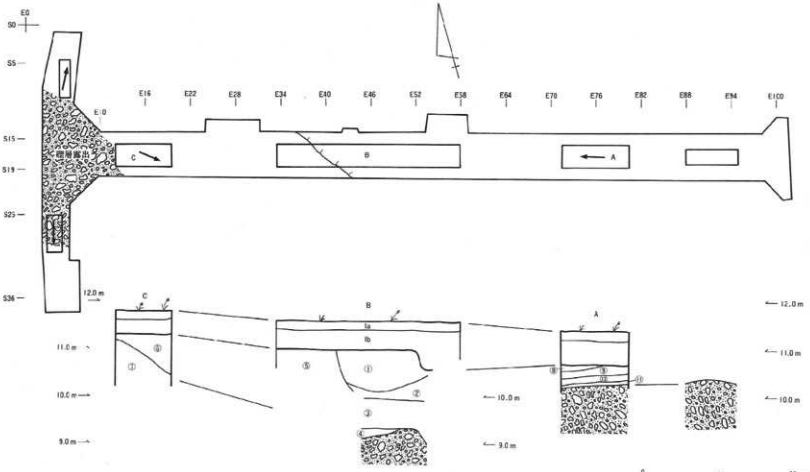
第2図　調査区配置図



第3図　実測基準線

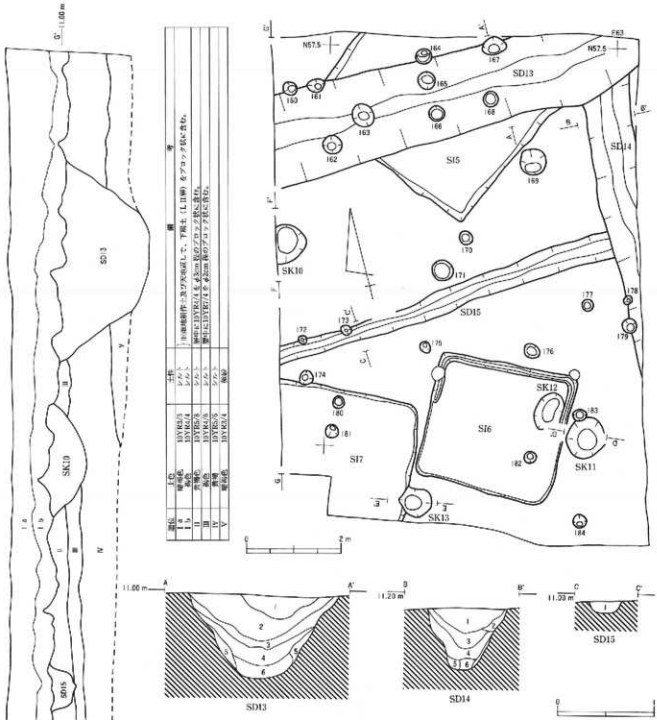

SD10
SD16
SD9
SD11
SD13
SD14
SD15
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SI1
SI2
SI4
SI5
SI6
SI7
SE1
SE2
SD5
SD6
SD3
SD4
0 1 2 3 4 5 6m

第4図　調査区平面図



層位	土色		土性	備　　考
Ⅰa	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	現耕作土
Ⅰb			シルト	Ⅰa主体の天地返し土
①	明黄褐色	2.5Y7/6	シルト	部分的に炭片、焼土粒を含む。
②	明黄褐色	2.5Y7/6	細砂	
③	明黄褐色	2.5Y7/6	粘土質シルト	ごく部分的に礫を含む。
④	灰黄色	2.5Y6/2	粗砂	
⑤	黄色	2.5Y8/4	中砂	左の色調を主とする中砂が、1~5cmの厚さで縞状に堆積している。
	灰黄色	2.5Y6/2		下層ほど砂の粒径は大きくなる。径5cm以下の礫が混じる。
⑥	黄色	2.5Y8/6	細砂	
⑦			礫混じり粗砂	径5cm以下の礫が混じる。
⑧	灰黄色	2.5Y8/4	シルト	
⑨	浅黄色	2.5Y7/4	シルト	
⑩	灰黄色	2.5Y8/4	極細砂	
⑪	灰黄色	2.5Y8/4	中砂	

第5図　南区基本層序模式図



SD13 土層柱記

層位	土色		土性	備考
1	暗色	10YR4/6	シルト	土器片を含む。(人為的堆積土)
2	暗褐色	10YR3/3	粘土	10YR4/6 シルトをブロック状に含む。(人為的堆積土)
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト質粘土	
4	黄褐色	2.5Y5/8	シルト質粘土	遺り幅には、水が流れたような堆積を示し、上層は硬化していたように粘土が多く含まれている。
5	暗色	10YR4/6	シルト質粘土	2・4層よりもシルトが多い。
6	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト質粘土	粘性は強く、ベタつくような状態。

SD14 土層柱記

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR3/4	シルト	
2	黄褐色	10YR5/8	シルト質粘土	
3	暗褐色	10YR2/3	シルト質粘土	
4	褐色	10YR4/6	シルト質粘土	
5	黄褐色	10YR5/8	シルト質粘土	
6	褐色	10YR4/7	粘土	

SD15 土層柱記

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR3/4	シルト	層全体に炭化物片を含む。

第 6 図　北区平面・基本層序

Ⅳ 基 本 層 序

調査対象地域の現況は畑であり、20cm程度の耕作土（Ⅰa層）、40cm程度の天地返し土（Ⅰb層）があり、各調査区に共通する層である。Ⅰ層を除去した面で古墳時代以降の遺構が検出されるが、天地返しが深く及んでいるため本来の遺構掘り込み面は確認できない。また、区ごとに層序が異なっており、特に南区は他の調査区とは著しく層序に違いが見られる。

南区（第4図）

Ⅱ層上面が遺構確認面であるが、南区全面には認められない。これは、前述のように後世の撹乱によるもので、遺構の堆積土を観察すると本来は全面に存在していたものと考えられる。これより以下では水性堆積状態を示すシルト層が確認される。このシルト層中から弥生土器や流紋岩製の剥片などを出土しているが、遺構は確認できなかった。さらにこのシルト層は、下層になるほど砂礫が多くなり拳大から人頭大の礫層へと漸次層相が変化している。これらの層の成因のひとつに河川堆積が考えられ、このことは第14次調査でも指摘されている（佐藤：1987）。今回の調査区内ではその範囲を押さえることはできなかったので断定はできないが南区では古墳時代の遺構が形成される以前には何らかの河川堆積を受ける状況下にあり層位は安定していなかったということができよう。また、E34グリット付近に層の切り合いが見られ、大局的には河川堆積土と思われるが、その場合河川の新旧関係がある可能性も考えられる。

北区（第6図）

5層確認された。Ⅱ層上面が遺構確認面である。Ⅱ層からⅣ層は、やや粘性の認められるシルトである。Ⅴ層は、微砂であり、南区や第14次調査との対比から河川堆積土である可能性が考えられる。Ⅳ層上面でごく弱い焼け面が2箇所確認され、付近から弥生土器と思われる破片が出土しているが所属時期を断定はできなかった。

Ⅴ 検出された遺構と遺物

1 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、竪穴住居跡6棟、竪穴状遺構1基、溝跡18条、土坑13基、井戸跡2基、小溝状遺構群、ピット183基である。各遺構は調査区全体で検出されているが、天地返しが深く遺存状況の悪いところもある。

竪穴住居跡

竪穴住居跡は、南区で4棟、北区で3棟検出された。

SI 1住居跡（第7図）

（位置）南区E22グリッドで検出された。

（重複）ピット、SK 6土坑に切られる。

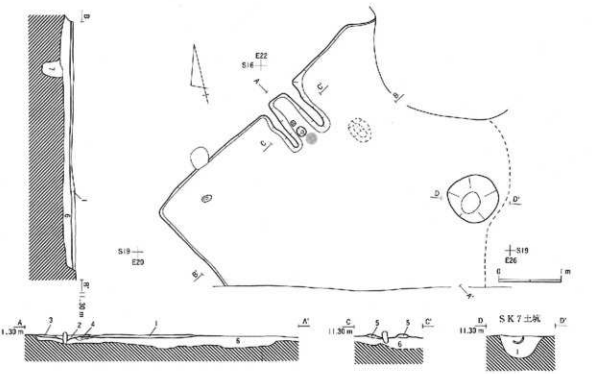
（平面形・規模）南半は調査区外であり、調査区内もすでに床面が削平されており、遺構の遺存状況は悪い。西壁4.8m、南壁1.6m以上である。西壁での方向はN-58°-Eである。

（堆積土）3層認められる。1層は北半を薄く覆っている。南半は掘り方埋土まで削平されている。2・3層はカマド内堆積土で、焼土が混じる。

（壁）基本層を壁としているが残りは悪く、5cm程度の高さである。

（床面）掘り方埋土上面が堅くしまっており、床面と考えられる。北壁から2.5m程度までは床面が残っているが、それ以南は残っていない。掘り方は、全体に20cm程度掘り込んでいる。

（柱穴）柱穴は検出されなかった。掘り方埋土除去、カマド南東に小ピットが検出されている。



層位	土色		土性	備考
1	浅黄橙色 黒褐色	10YR2/4 10YR3/1	砂質シルト 砂質シルト	混在
2	にぶい黄橙色	10YR5/3	細砂	焼土ブロックが混じる。カマド内堆積土。
3	灰褐色 浅黄橙色	5YR5/2 10YR8/4	焼土 細砂	混在。カマド内堆積土。
4	にぶい黄褐色 灰黄褐色	10YR7/4 10YR5/2	細砂 細砂	混在。
5	にぶい黄橙色	10YR6/4	砂質シルト	カマド袖構築土。
6	にぶい黄橙色	10YR7/3	細砂	上部に浅黄橙色、灰白色の細砂ブロックが混じり、しまっている。

SK 7土層註記

層位	土色		土性	備考
1	褐色	10YR4/4	砂質シルト	炭化物粒、焼土粒が混じる。

第7図　SI1住居跡平面・断面図

（カマド）北壁中央部にある。100cm×80cmの大きさで、燃焼部のみ残る。袖はにぶい黄褐色砂質シルトで構築される。袖の間西寄りに細長い角柱状の礫が立っており、支脚が残っていたものと考えられる。また、南端に焼け面があるが、厚さ2cm程度と弱いものである。

（貯蔵穴他）南東部に土坑が1基検出された（SK 7土坑）。径80cmの円形で、深さ36cmである。堆積土は単層である。堆積土から、土師器坏、須恵器甕の体部破片が出土した。土坑の位置と、出土遺物からこの住居の貯蔵穴と考えられる。

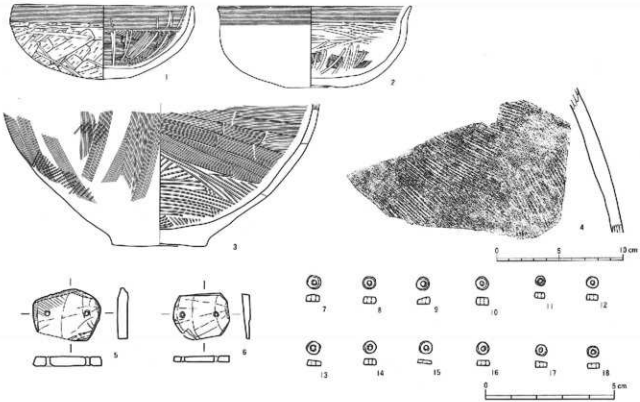
（出土遺物）遺物は、387点出土している。図示した遺物は堆積土や掘り方埋土から出土した円板形石製模造品2点、白玉12点、SK 7土坑から出土した土師器坏2点、土師器甕1点、須恵器甕1点である。石製模造品が他の住居跡に比べて多く出土しているのが特筆される。

SI 2住居跡（第9図）

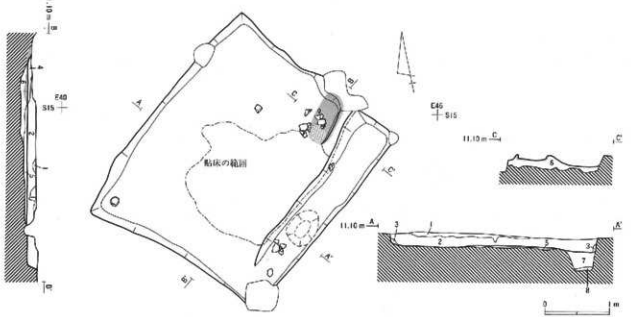
（位置）南区E40グリッドで検出された。

（重複）ピット、小溝状遺構群に切られる。

（平面形・規模）若干の歪みが認められるが、北壁3.2m、西壁4 mの方形を呈している。西壁での方向はN－48°－Eである。



第8図　SI1 出土遺跡



層位	土色		土性	備考
1	黒褐色	10YR3/1	シルト	
2	にぶい黄橙色	10YR6/3	シルト	
3	にぶい黄橙色	10YR7/4	シルト	
4	灰赤色	2.5Y4/2	シルト	焼土ブロックを多量に含む層。カマド内堆積土。
5	淡黄色	2.5Y8/4	焼土質シルト	しまりあり悪い　粘床
6	浅黄橙色 淡黄色	10YR8/4 2.5Y8/4	焼土質シルト 焼土質シルト	掘在　カマド付近では、焼土ブロックが混じる。掘り方埋土
7	にぶい黄褐色	10YR5/3	焼土質シルト	わずかに炭を含む。ピット堆積土
8	灰白色	10YR8/1	細砂	底にはりつくように分布。ピット堆積土

第9図　SI2 住居跡平面図・断面図

（堆積土）４層認められ、自然堆積と思われる。２層が全体を覆い、４層はカマド内堆積土で、焼土ブロックを多量に含む。

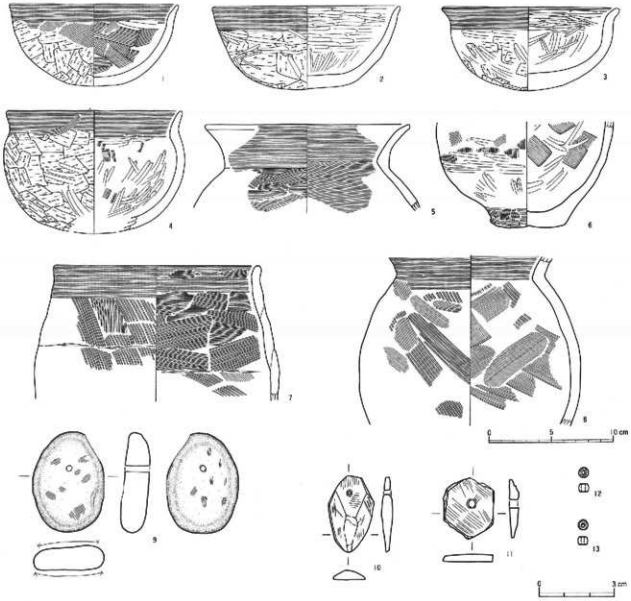
（壁）基本層を壁とする。高さは20cm程で、傾斜は急である。

（床面）掘り方埋土の上面を床面としている。住居中央部には、淡黄色粘土質シルトの貼り床が残存している。南東壁際が60cmの幅で一段下がる。

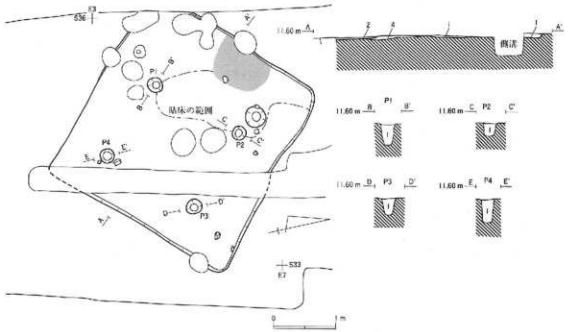
（柱穴）柱穴は検出されなかった。床面下のダメ押しの際に、東壁際に60cm×40cm、深さ30cmのピットが検出されており、なんらかの施設の可能性が考えられる。

（カマド）北壁の東寄りにカマドが設けられている。90cm×80cmの範囲で燃焼部のみ検出された。カマド袖は東側はよく残っており、西側はごく一部である。内部は非常によく焼けており、焼け面の厚さは10cmに及ぶ。

（出土遺物）遺物は692点出土している。図示した遺物は、堆積土２層から出土した土師器甕、カマド内堆積土から出土した土師器坏、土師器甕、床面から出土した土師器坏２点である。また、剣形、円板形の石製模造品２点と臼玉２点が堆積土２層から出土している。



第10図　SI2 出土遺物



層位	土色		土性	備　考
1	褐色	10YR4/6	シルト	
2	暗褐色	10YR3/4	シルト質粘土	塊状に焼土ブロックを含む。炭生物片が多い。
3	黄褐色	10YR5/6	シルト質粘土	貼床

ピット土層註記

ピット番号	層位	土色		土性	備　考
1	1	褐色	7.5YR4/4	砂質シルト	
2	1	黄褐色	10YR5/8	シルト	
3	1	褐色	10YR4/6	シルト	
4	1	褐色	7.5YR4/4	砂質シルト	

第11図　SI3 住居跡平面図・断面図

SI 3 住居跡（第11図）

（位置）E 3 S31 グリットで検出された。

（重複）SI 4 の直上に位置し、これを切っている。

（平面形・規模）天地返し等の攪乱があり、南西部はすでに削平されており床面の遺存状況も悪く、検出段階で既に貼り床の一部が露出していた部分も認められた。隅北方向の一部は調査区外へ延びているが、方形を基調とするものと考えられる。東西方向3.3m、南北方向3.2m、東壁での方向は N－44°－E である。

（堆積土）３層認められる。２層は焼土まじりの土である。

（壁）SI 4 の堆積土を壁としており、遺存状況は悪く、確認できる高さは２cm程度である。

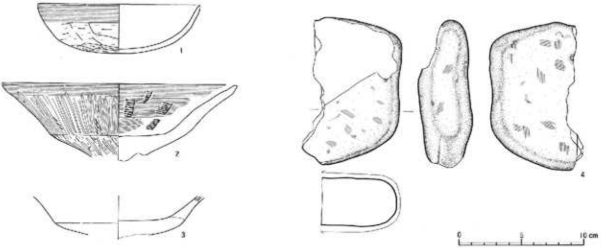
（床面）天地返しや一部掘りすぎなどで、すでに SI 4 の床面がでてしまった部分もあるが、ほぼ平坦である。

住居西部に黄褐色シルト質粘土の貼り床が残存している。掘り方は認められない。

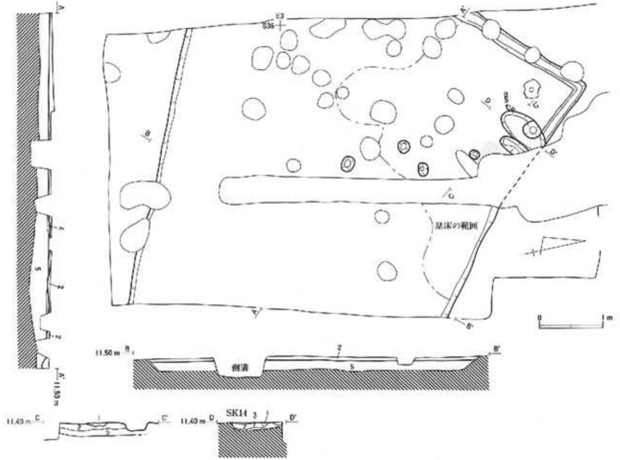
（柱穴）住居内で多数のピットを確認したが、ほとんどが天地返しによるものであり、堆積土の違いから P 1～P 5 が住居に伴うものと考えられる。P 1～P 4 は深さが20～40cm程で、P 1・P 2 で径10cmの柱痕跡を確認している。ピット中心での柱間寸法は、南北間（P 1－P 4）で1.5m、東西間（P 2－P 3）で1.4m である。配置は住居の対角線上からは若干東にずれている。

（カマド）確認できたのは焼土の分布する範囲だけでカマドは検出できなかった。

（出土遺物）遺物は94点出土している。図示した遺物は、床面から出土した土師器坏１点、高坏２点である。また、堆積土中から３面に磨痕を持つ礫石器が出土している。



第12図　SI3 出土遺物



層位	土色		土性	備　　考
1	黒褐色	10YR2/3	シルト質粘土	焼土ブッロク混入
2	暗褐色	10YR3/4	シルト質粘土	径の小さい地山ブッロクを含む。若干の炭化物片あり。
3	黄褐色	10YR5/8	シルト質粘土	貼床
4	褐色	10YR4/6	シルト質粘土	掘り方埋土
5	にぶい黄褐色	10YR7/3	シルト	掘り方埋土

第13図　SI4 住居跡平面図・断面図

SI 4 住居跡（第13図）

（位置）南区E3S31グリットで検出された。

（重複）SI 3に切られる。しかし、北壁と南壁で方向が合わないので別の切り合い関係がある可能性もある。

（平面形・規模）北壁と西壁の一部の他は調査区外へ延びており、拡張して遺構の確認を行ったがさらに調査区外へ延びているのでは詳細は不明であるが、方形を基調とするものと考えられる。西壁での方向はN－40°－Eである。カマド部分は検出後一部崩壊している。

（堆積土）大別3層認められた。1層はカマド内堆積土で焼土ブロックを含んでいる。2層が全体を覆っている。

（壁・周溝）基本層を壁とする。遺存状況の良い北壁で10cm程の高さを計り、傾斜は急である。周溝は西壁からカマド付近にかけて検出された。周溝の埋土は1層である。

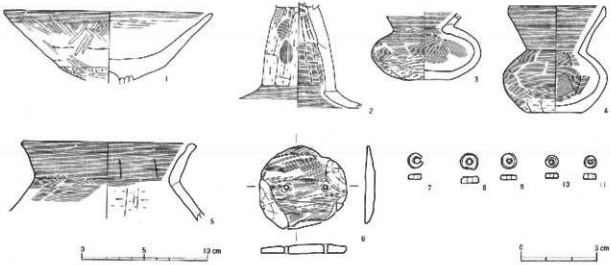
（床面）掘り方埋め土の上面を床面とし、北西部には黄褐色シルト質粘土の貼り床が遺存している。掘り方は全体に20cm程である。

（カマド）北壁の西寄りにある。90cm×70cmの範囲で燃焼部のみ検出された。カマド袖は西側には高まりが残っていたが、東側はすでに削平されその痕跡だけである。検出後大雨の影響で約1/2が崩落している。内部はかなり焼けているが、焼け面の厚さは4cm程しか残っていない。

（床面施設）カマド西袖の外側に土坑が1基検出された（SK14）。70×50cmの楕円形で、深さは15cmである。堆積土は3層で、1層には焼土ブロックを多く含んでいる。遺物は土師器小型壺が出土している。検出位置からカマドに関連する施設と考えることができよう。他には、床面でピットが5基検出されたが詳細は不明である。

（柱穴）床面でピットは確認できたが柱穴となるようなものは確認できなかった。

（出土遺物）遺物は457点出土している。図示した遺物は、床面、堆積土中から出土した土師器高坏2点、土師器甕、円板形石製模造品、臼玉5点である。また、SI 4を切る側溝を掘った際に土師器壺が出土しており（第14図－4）、出土層位は床面であると思われる。



第14図　SI4 出土遺物

SI 5 住居跡（第15図）

（位置）北区で確認された。

（重複）SD13、ピットより古い。

（平面形・規模）北半は調査区へ延び、SD13が住居の中心を通っているので詳細は不明であるが、方形を基調とするものと思われる。検出できたのは西壁・東壁・北壁の一部だけである。推定できる東西間の長さは4 mである。

西壁での方向はN－50°－Eである。

（堆積土）2層認められる。1層が全体を覆う。2層はカマド内堆積土で焼土ブロックを多く含んでいるが、SD13に削平されており残りはわずかである。

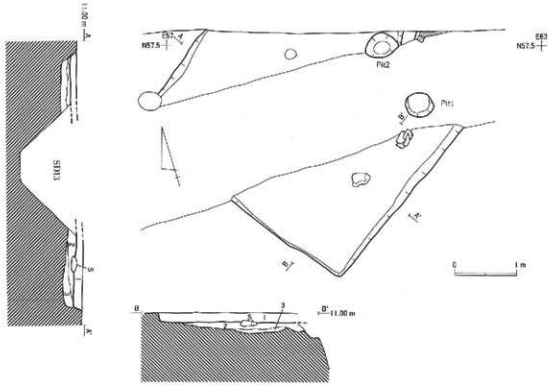
（壁）基本層を壁としており、高さは10～18cm程で傾斜は急である。

（床面）掘り方上面が固くしまっており床面と考えられ、全体的に平坦である。SD13より北の部分は特に固くしまっている。掘り方は全体に10cm程掘り込んでいるが、一部20cm程になるところもある。

（柱穴）SD13の南辺部分で径40cm程のピットを検出している（pit 1）。堆積土には焼土ブロックが混入している。底面で径10cmほどの柱痕跡を確認していることから柱穴の可能性が考えられるが、他に柱穴となるようなピットを確認していないので断定はできない。底面からは石製模造品の未製品と思われる剥片と同一母岩の剥片15点が出土している（第16図－4～8）。他には、カマドの西でピットを1基確認している（pit 2）。

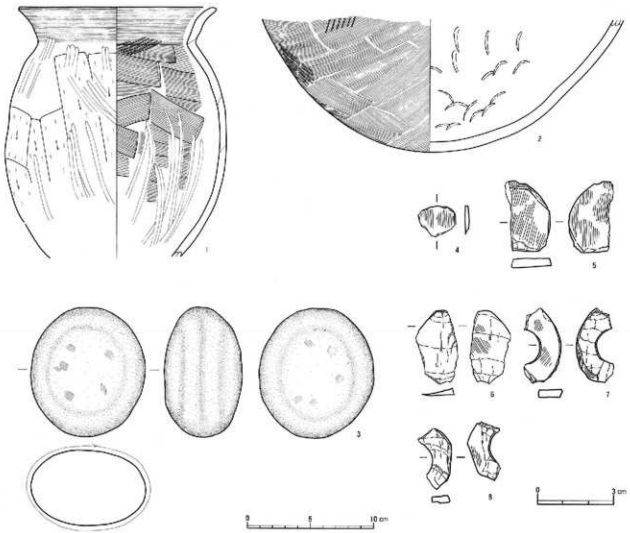
（カマド）調査区北辺とSD13とのわずかな間で検出しており遺存状況は良くなく、カマド袖西側と燃焼部の一部が確認できたのみである。西袖脇で角柱状の礫が立っており、支脚が残っていたものと思われる。

（出土遺物）遺物は269点出土した。図示した遺物は、床面から須恵器甕の底部、堆積土中から出土した土師器甕である。柱穴と考えられるピットの底部からは石製模造品の未製品の剥片が出土している。未製品は縁辺及び内側に研磨痕が認められ、内側が円形に加工されているものは、両面にも研磨痕が認められる。加工の形状から見てこれらの剥片は、勾玉形の石製模造品の未製品とその加工途中にできた剥片である可能性が高いといえよう。図示できなかったものも含めてこれらの剥片の石材は、千枚岩に比定され、ギョウカイ岩質のものが圧力を受けて、節理にそって剥がれたものであるとの御教授を受けている。[83]



層位	土色		土性	備考
1	暗色	10YR4/4	シルト質粘土	炭化物片をわずかに含む。
2	黄褐色	10YR5/6	シルト	掘り方埋土
3	暗色	7.5YR4/4	シルト質粘土	

第15図　SI5住居跡平面図・断面図



第16図　SI5 出土遺物

SI 6 住居跡（第17図）

（位置）北区で検出された。

（重複）ピットに切られる。

（平面形・規模）一辺約2.7m の方形である。西壁での方向は N－24°－E である。

（堆積土）単層である。

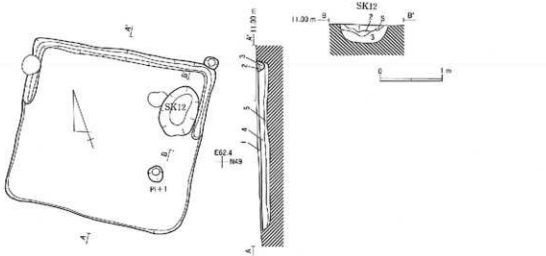
（壁・周溝）基本層を壁としているが、残りが悪く高さは 4 cm程度である。北壁から東西両壁北端にかけて周溝が巡っている。床面からの深さは10cmほどで、幅は20cmである。周溝堆積土は 2 層である。

（床面）掘り方上面が固くしまっているので床面と考えられる。掘り方は全体的に約20cmほど掘り込んでいる。

（柱穴）床面でも、掘り方埋土を除去している際にも検出できなかった。

（床面施設）土坑 1 基（SK12 土坑）、ピット 1 基を検出した（pit 1）。SK12 土坑は80×60cmの楕円形を呈し、深さ30cmである。堆積土は 2 層認められた。堆積土中から石製模造品を出土している。出土遺物や検出位置から貯蔵穴の可能性が考えられる。

（出土遺物）遺物は85点出土している。図示した遺物は、堆積土中から出土した土師器甕、床面から出土した両面に研磨痕のある礫石器である。SK12 土坑からは、勾玉形の石製模造品が出土している。

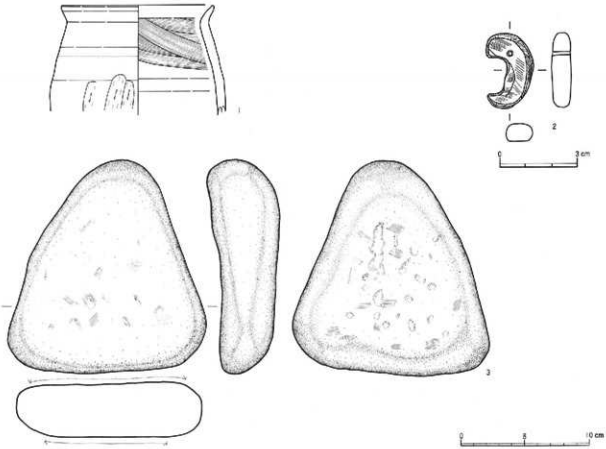


層位	土色		土性	備考
1	褐色	10YR4/6	粘土	
2	褐色	7.5YR4/6	粘土	周溝埋土
3	褐色	10YR4/6	シルト質粘土	周溝埋土
4	黄褐色	10YR5/8	シルト	掘り方埋土
5	褐色	10YR4/6	シルト	掘り方埋土

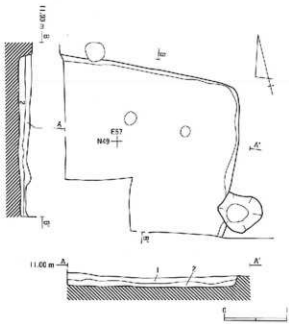
SK12 土層註記

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR3/4	シルト質粘土	炭化物片を多く含む。
2	褐色	10YR4/6	シルト質粘土	
3	褐色	10YR4/4	シルト質粘土	粘性が強い

第17図　SI6 住居跡平面図・断面図



第18図　SI6 出土遺物

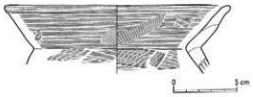


層位	土色		土性	備　考
1	褐色	10YR4/6	シルト質粘土	炭化物片をわずかに含む。
2	黄褐色	10YR5/8	シルト	

第19図　SI7 竪穴状遺構平面図・断面図

SI 7 竪穴状遺構（第19図）

北区で検出された。当初は竪穴住居として登録していたが、ほとんどが調査区外へのび詳細がつかめないことや、柱穴、カマド等の施設も確認できないこと、また、床面も明確でなく、遺物も他の住居跡と比較すると55点と少ないことなどから住居跡とする根拠が薄く竪穴状遺構と判断した。堆積土は2層で、所々に地山ブロックを含んでいる。規模は3×2.5m以上である。遺物は、土師器甕が堆積土中から出土している。



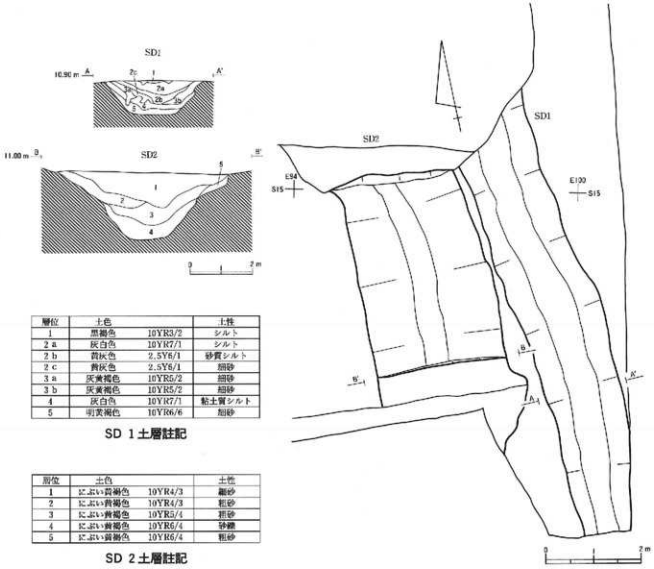
第20図　SI7 出土遺物

溝跡

溝跡は、南区・北区合わせて18条検出された。しかし、調査区の制限から全体形が判明したものはない。E－46～64グリットでは、小溝状の遺構群が多数検出されているが、これらは、小溝状遺構群として後述する。遺物は、集中して出土しているSD 5・17以外は、摩滅したものや細片が多く、図示できたものは少ない。

SD 1 溝跡（第21図）

E94グリットで検出された。SD 2とほぼ平行しており、方向はN－6°－Wで直線的な溝である。確認された長さは8.8mで、上端幅1.7m、下端幅70cm、深さ5.5cmである。断面形は逆台形で、堆積土は5層である。底面には若干の起伏が見られるが、南へ傾斜している。遺物は68点が出土しており、図示したのは土師器坏と剣形石製模造品の2点である（第26図1・2）。



層位	土色		土性
1	黒褐色	10YR3/2	シルト
2 a	灰白色	10YR7/1	シルト
2 b	青灰色	2.5Y6/1	砂質シルト
2 c	青灰色	2.5Y6/1	細砂
3 a	灰黄褐色	10YR6/2	細砂
3 b	灰黄褐色	10YR5/2	細砂
4	灰白色	10YR7/1	粘土質シルト
5	明黄褐色	10YR6/6	細砂

SD 1 土層註記

層位	土色		土性
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	細砂
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粗砂
3	にぶい黄褐色	10YR5/4	粗砂
4	にぶい黄褐色	10YR6/4	砂礫
5	にぶい黄橙色	10YR6/4	粗砂

SD 2 土層註記

第21図　SD1 SD2 平面図・断面図

SD 2 溝跡（第21図）

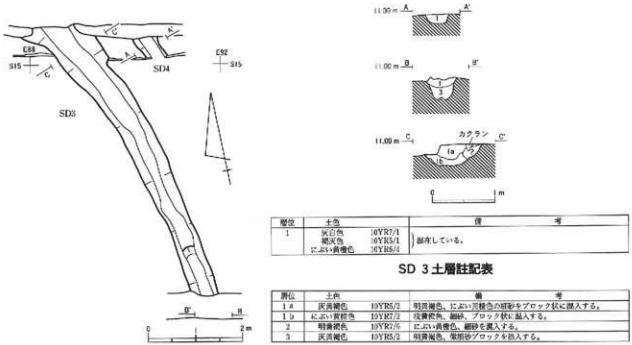
E94グリットで検出された。方向は、N－5°－Wで直線的な溝である。確認された長さは5.5mで、上端幅2.8m、下端幅54cm、深さ1.1mである。断面形は開いたU字形で、堆積土は4層である。堆積土には、砂礫（ϕ 1～20cm）を多く含んでいる。底面はほぼ平坦である。遺物は226点が出土しているが、細片が多く図示できるものは少なく、擦痕のある礫が1点だけである（第26図3）。

SD 3 溝跡（第22図）

E88グリットで検出された。方向はおおむねN－10°-Wで、緩やかに弧を描いている。確認された長さは6.5m、上端幅70cm、下端幅30cm、深さ35cmである。断面形はU字形で、底面は南端部で一段下がっており、南東方向に傾斜するものと考えられる。堆積土は2層である。遺物は11点出土しているが、細片であり図示できるものはない。

SD 4 溝跡（第22図）

E88グリットで検出された。天地返しの浅い部分にかろうじて残っており、方向はN－10°-Wである。確認された長さ50cm、上端幅40cm、下端幅38cm、深さ15cmである。断面形は箱形である。堆積土は1層のみである。遺物は12点出土しているが、細片であり図示できるものはない。



層位	土色		備　考
1	灰白色 褐灰色 にぶい黄橙色	10YR7/1 10YR5/1 10YR5/4	部在している。

SD 3 土層註記表

層位	土色		備　考
1 a	灰黄褐色	10YR5/2	明黄褐色、にぶい黄橙色の粒砂をブロック状に混入する。
1 b	にぶい黄橙色	10YR7/2	灰黄褐色、褐砂、ブロック状に混入する。
2	明黄褐色	10YR7/6	にぶい黄橙色、細砂を混入する。
3	灰黄褐色	10YR5/2	明黄褐色、塊状砂ブロックを含入する。

SD 4 土層註記表

第22図　SD3・SD4 平面図・断面図

SD 5 溝跡（第23図）

E76 グリッドで検出された。方向は N－24°－W で、直線的である。確認された長さは7m、上端幅2.2m、下端幅1.3m、深さ42cmである。断面形は箱形であり、底面西半分がやや深くなる。底面は南東方向に下がっている。堆積土は4層に分かれるが、明瞭なのは1、2層であり、3、4層の色調は周囲の層と同様であり、土質の違いから区別することができた。

堆積土1層を除去中に土師器の大型破片が多量に出土した。1×3 m の範囲に、現地で確認するかぎり33個体の土師器があった(第23図②)。出土層位は1層中から2層上面である。このことから、溝がかなり埋まった段階で土器を廃棄する行為が行われたものと考えられる。また、土師器の周囲で石製模造品が出土したので1・2層の土を全て採集し、後に水洗選別を行っている。遺物は1,814点が出土している。そのうち図示できたのは52点である。土師器は坏9点、高坏21点、壷6点、甕9点、石製模造品は剣形3点、円板形1点、臼玉2点（うち1点は水洗選別による）であり、石材は、円板形が安山岩質凝灰岩製であるほかは滑石製である。有孔の物は全て単孔である（第27図～第30図）。

SD 6 溝跡（第25図）

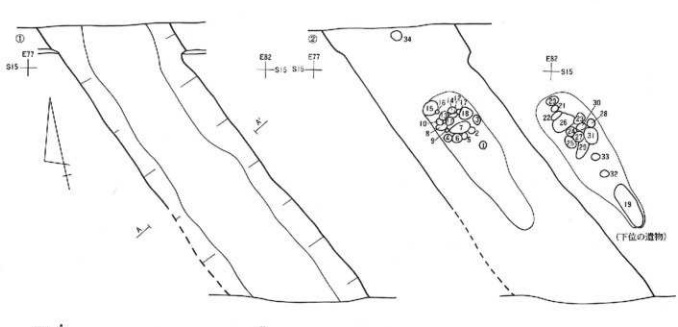
E64 グリットで検出された。方向は、N－40°－E で直線的な溝である。確認された長さは約5.2m、上端幅55cm、下端幅20cm、深さ12cmである。断面形は逆台形で底面はほぼ平坦である。堆積土は1層である。遺物は8点出土しているが、いずれも細片であり図示できるものはない。

SD 7・8 溝跡（第33図）

当初は、それぞれ単独の溝跡と考えていたが、その後、方向性や堆積土の様子、底面の状況などから後述する小溝状遺構群に含まれるものとした。

SD 9 溝跡（第25図）

E46 グリットで検出された。方向は N－14－W である。確認された長さは5.8m、上端幅1.1m、下端幅40cm、深さ30cmである。断面形は、U 字形で、南東方向に傾斜している。堆積土は3層である。堆積土1層の所々に灰白色火山灰が分布している。遺物は20点出土しており、図示できたのはロクロ調整による土師器坏1点である（第26図4）。



SD 5 土層註記表

層位	土色		土性	備　　考
1	褐色	10YR4/4	細砂	灰黄褐色、暗褐色、シルトが混じる。炭化物を含む。
2	褐色	10YR4/6	砂質シルト	灰黄褐色、シルトが小ブロック状に多く混入する。炭化物を含む。
3	黄褐色	10YR5/6	砂質シルト	灰黄褐色、シルトが少量混入する。炭化物を含む。
4	黄褐色	10YR5/6	細砂	灰黄褐色、シルトが少量混入する。

第23図　SD5 平面図・断面図

SD10 溝跡（第25図）

E16 グリットで検出された。主な、方向は N－21°－W であるが南半で湾曲している。確認された長さは約6.2m、上端幅80cm、下端幅30cm、深さ10～30cmである。断面形は、開いた U 字形で北から南へ傾斜している。堆積土は 3 層である。遺物は69点が出土しており、図示できたのは土師器高坏 1 点のみである（第26図 5）。

SD11 溝跡（第25図）

S25 グリットで検出された。方向は N－89°－W である。確認された長さは3.5m、上端幅78cm、下端幅14cm、深さ70cmである。断面形は逆台形で、底面は平坦である。堆積土は 4 層である。遺物は59点出土しているが、いずれも細片であり図示できるものはない。

SD12 溝跡（第25図）

E22 グリットで検出された。SD12 溝跡は SK 6、SK 8 と重複しており、新旧関係は認められないので、ほぼ同時期に存在していたものと考えられる。その場合 SD12 は SK 6、8 を接続する機能を要していたものと考えることもできよう。方向は N－48－E である。確認された長さは1.7m、上端幅58cm、下端幅21cm、深さ40cmである。断面形は逆台形で、底面は平坦である。堆積土は 3 層である。遺物は 2 点出土しているが、図示はできなかった。

SD13 溝跡（第 6 図）

北区で検出された。SD13 溝跡は SI 5、SD14 と重複し、全てを切っている。方向は N－86°－E である。確認された長さは7.8m、上端幅1.8m、下端幅36cm、深さ90cmである。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 6 層認められ、1・2 層はブロック状に土が混入するなど人為的な堆積状況を呈し、これより下層は自然堆積と考えれる。遺物は311点が出土しており、図示できたのは土師器坏 4 点、高坏 1 点、蓋 1 点、甕 1 点、須恵器蓋 1 点、

石製模造品2点(円板形1、勾玉形1)、擦痕のある礫1点である。石製模造品の石材は勾玉形が滑石製で、円板形は安山岩質凝灰岩である(第26図7～17)。

SD14 溝跡(第6図)

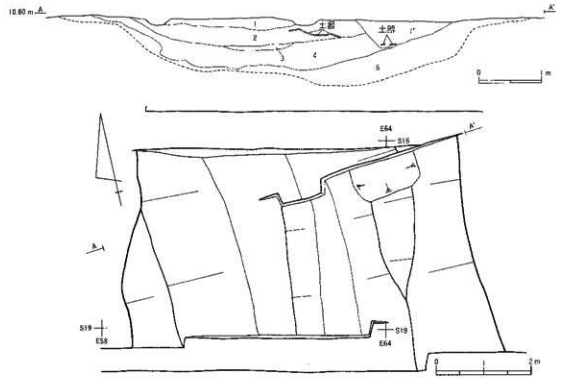
北区で検出された。SD14溝跡はSD13・15溝跡と重複し、SD13溝跡に切られて、SD15溝跡を切っている。方向はほぼ真北である。確認された長さは3.5m、上端幅90cm、下端幅26cm、深さ50cmである。断面形は開いたU字形で、北へ傾斜している。堆積土は6層認められ、人為的な堆積状況を呈している。遺物は130点出土しており、図示できたのは土師器坏1点だけである(第26図6)。

SD15 溝跡(第6図)

北区で検出された。SD15溝跡はSD14溝跡と重複し、SD14溝跡に切られている。方向はN－81°－Eである。確認された長さは7.3m、上端幅58cm、下端幅は20cm、深さは18cmである。断面形は箱形で、底面は緩やかに東へ傾斜している。堆積土は1層である。遺物は20点出土しているが、いずれも細片であり図示できるものはない。

SD16 溝跡(第25図)

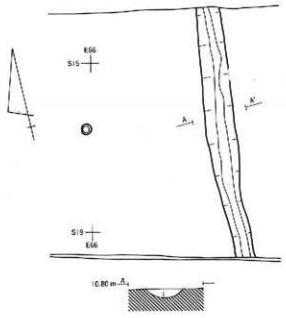
E46グリッドで検出された。SD16はピット群、小溝遺構群と重複している。ピット群に切られ、小溝状遺構群を切っている。方向はN－14°－Wである。確認された長さは6.1m、上端幅60cm、下端幅44cm、深さ50cmである。断面形は箱形で、底面は南に傾斜している。堆積土は5層に分かれ、最上層中に灰白色火山灰ブロックがわずかに混じっている。また、溝の堆積土はピットの堆積土と非常に似ており、溝上面で見つかるピットもあるが、溝を掘り込む過程で発見されたピットもある。遺物は出土しなかった。

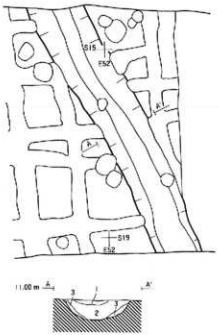


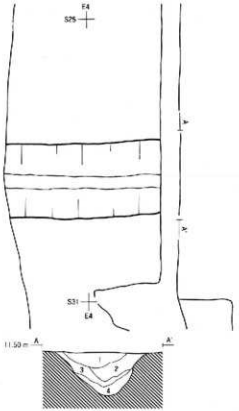
SD17 土層註記

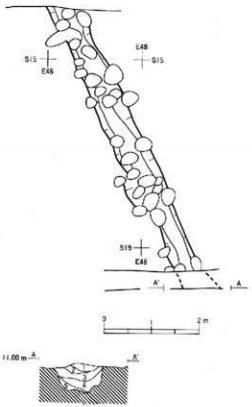
層位	土色		土性	備考
1	黒褐色	10YR5/8	シルト	酸化鉄、マンガン粒が多く見られる。
1'	オリーブ褐色	2.5Y4/6	シルト質砂	一時的な流路と考えられるが、平面的には検出できなく断面で判断した。
2	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	炭化物片を多く含み層上部に酸化鉄斑が認められる。土器を多く含む層である。
3	黄褐色	2.5Y5/4	シルト質粘土	酸化鉄斑が認められる。
4	にぶい黄褐色	10YR5/4	粘土	筋状・斑状の酸化鉄の沈着が認められる。底下部にマンガン粒が多くみられる。
5	褐色	10YR4/6	砂	

第24図 SD17平面図・断面図









層位	土色		土性	備　考
1	暗色	10YR4/6	シルト	炭化物片を若干含む。

SD 6 土層註記

層位	土色		土性	備　考
1	褐色	10YR4/4	シルト	鉢上面中央に灰白色火山灰を含んでいる。
2	暗褐色	10YR3/4	シルト	鉢全体に炭化マンガン粒を含んでいる。
3	褐色	10YR4/6	シルト	鉢性は上部と縁より中央が強い。

SD 9 土層註記

層位	土色		土性	備　考
1	褐色	10YR4/4	粘砂	φ3mm～1cmの小礫を多量に混入する。
2	灰褐色	10YR3/4	粘土質シルト	10YR5/6 黄褐色、粘土質シルトをブロック状、φ3mm～1cmの小礫・砂砂を少量混入する。
3	暗灰色	10YR4/1	粘土	10YR4/4 褐色の粘砂、φ3mm～1cmの小礫を少量含む。
4	灰黄褐色	10YR5/2	粘土	

SD11 土層註記

層位	土色		土性	備　考
1	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	灰白色火山灰がブロック状に混入する。
2	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	
3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	
4	灰黄褐色 にぶい黄褐色	10YR4/2 10YR7/3	シルト 砂質シルト	ブロック状に混在する。
5	にぶい黄褐色	10YR7/3	シルト	

SD16 土層註記

層位	土色		土性	備　考
1	褐色	10YR4/4	シルト質粘土	炭化物片をわずかに含む。
2	暗褐色	10YR3/4	シルト	2.5YR4/6を小ブロック状に含む。
3	黄褐色	10YR5/8	シルト	炭化物片を含む。

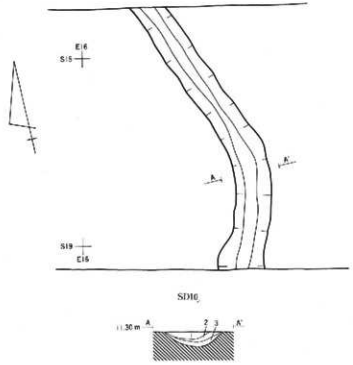
SD10 土層註記

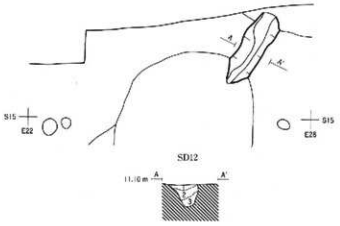
層位	土色		土性	備　考
1	褐色	10YR4/4	シルト	基本層L目層を小ブロック状に含む。鉢下部に酸化鉄の沈着がみられる。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	基本層L目層をブロック状に含む。
3	暗褐色	10YR3/4	シルト質粘土	砂質分に富むところと粘土質のところがうすい互層になっており粘土質の部分では粘性もありしまりもあるが、砂質のところは柔である。

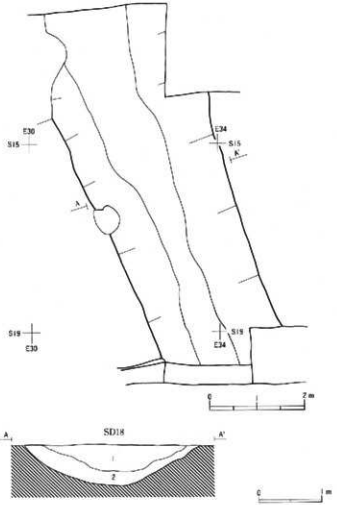
SD12 土層註記

層位	土色		土性	備　考
1	褐色	10YR4/4	細砂	
2	黄褐色	10YR5/6	シルト質細砂	粘性は弱くシルト分があい混と粘性の強い砂質の壁とが互層になっている。

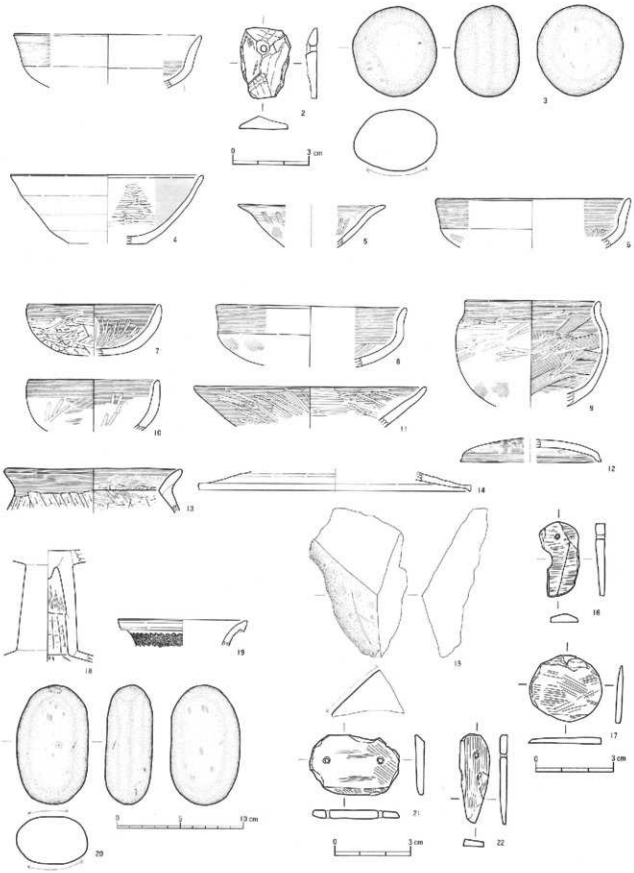
SD18 土層註記





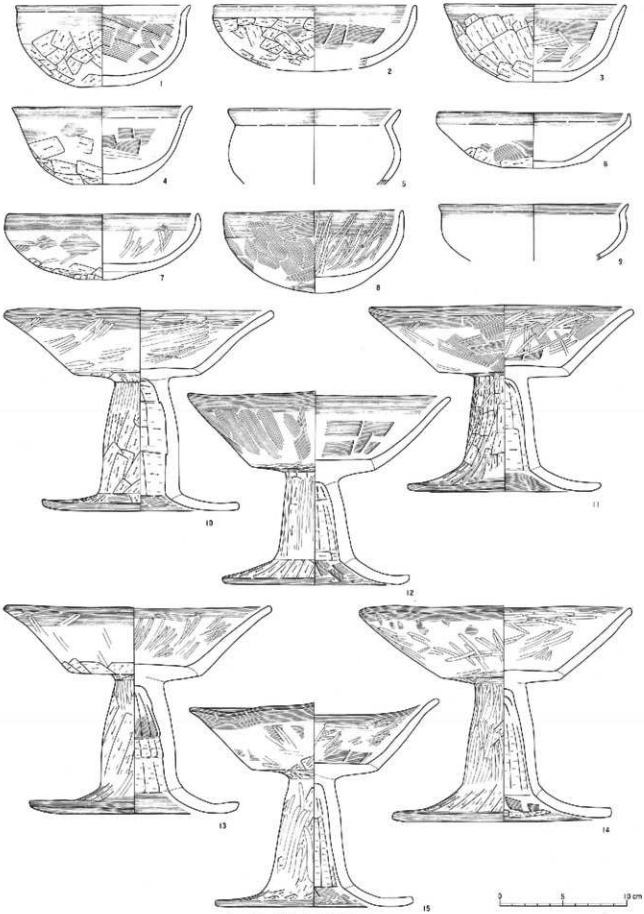


第25図　溝跡平面図・断面図

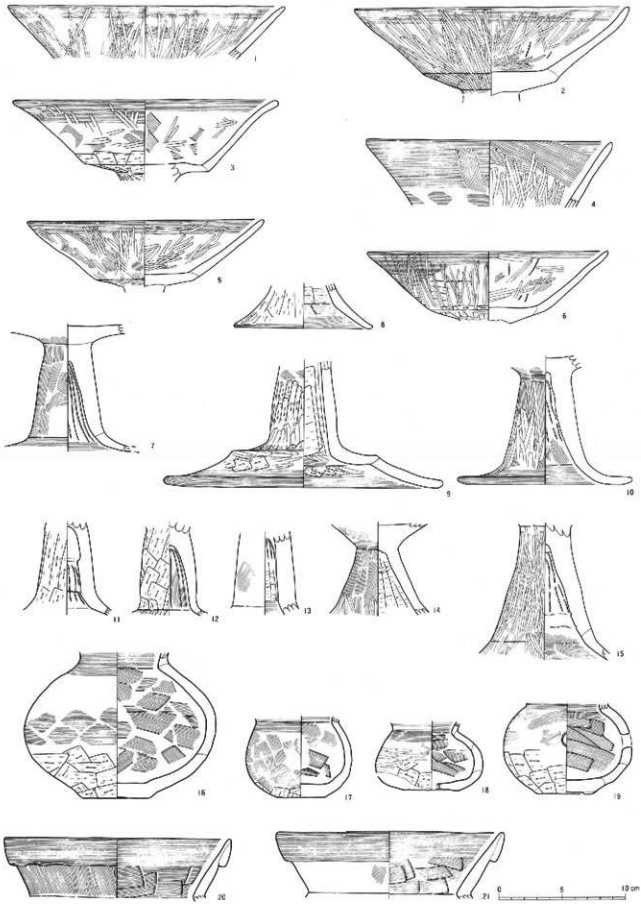


1・2　SD-1　3　SD-2　4　SD-9　5　SD-10　6　SD-14　7～17 SD-13　18～22　SD-18

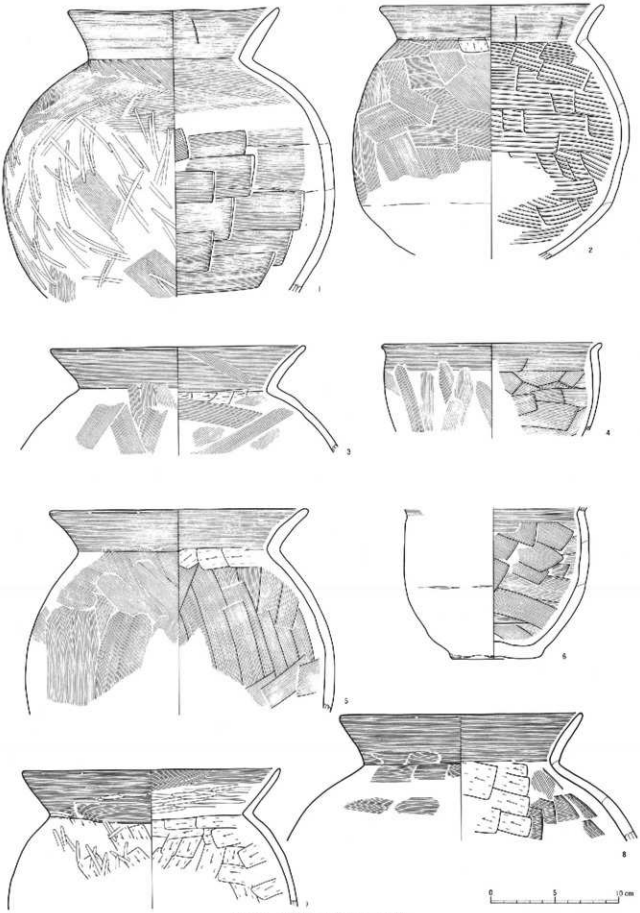
第26図　溝跡出土遺物①



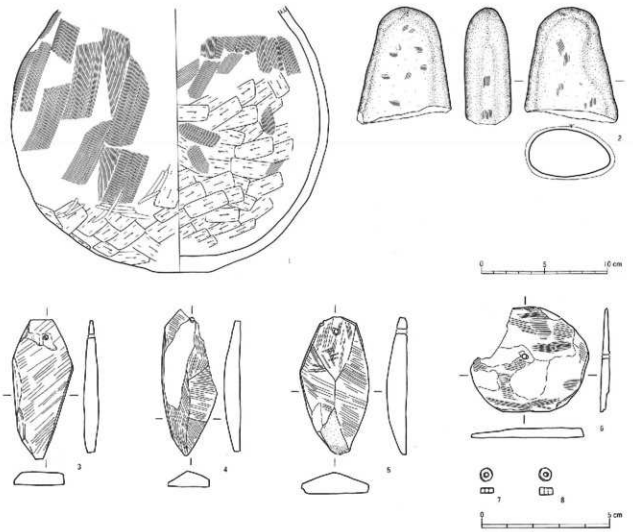
第27図　溝跡出土遺物②（SD5）



第28図　溝跡出土遺物③（SD5）



第29図　溝跡出土遺物④（SD5）

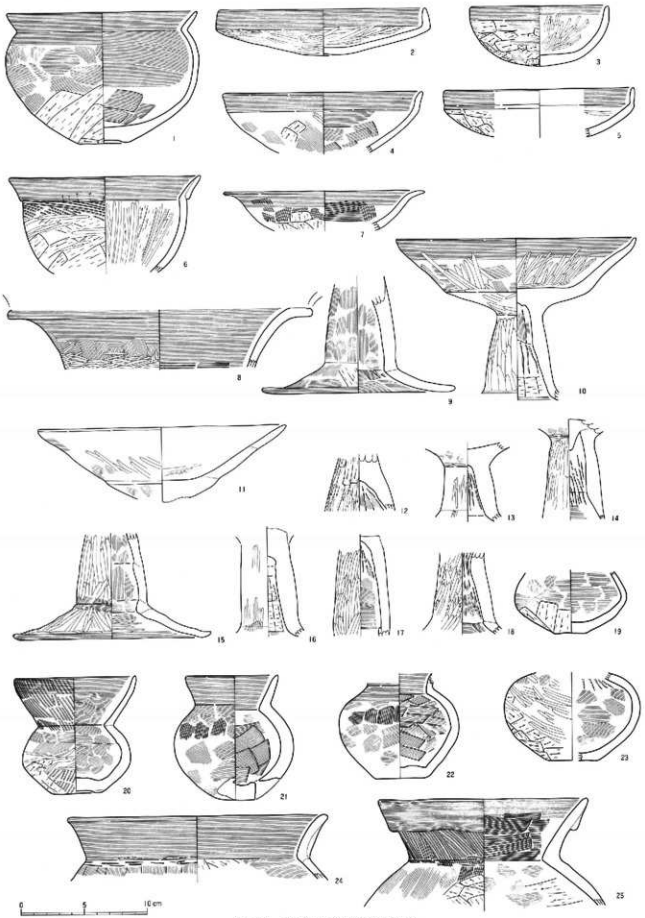


第30図　溝跡出土遺物⑤（SD5）

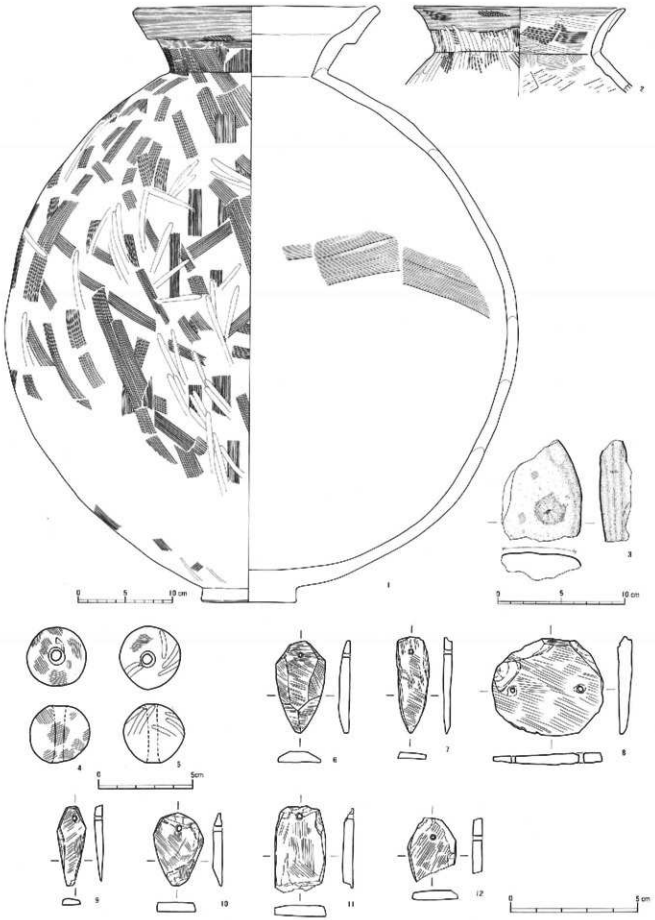
SD17 溝跡（第24図）

E58 グリッドで検出された。SD17 溝跡はピット群、小溝状遺構群と重複し、ピット、小溝状遺構群に切られている。方向は N－24°－W である。確認された上端幅7.5m、下端幅80cm、深さ80cmである。断面形は船底形で、緩やかに壁が立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は 4 層に分かれ、自然堆積である。遺物は1300点が出土し図示できたのは38点で、土師器は坏 7 点、高坏11点、壷 9 点、石製模造品は剣形 6 点、円板形 1 点（安山岩質凝灰岩 3 点　滑石 1 点）、他には土玉 2 点、擦痕のある礫 1 点である。第31図21に示した小形壷は焼成後に内部より外に向けて穿孔されている。（第31図・32図）。

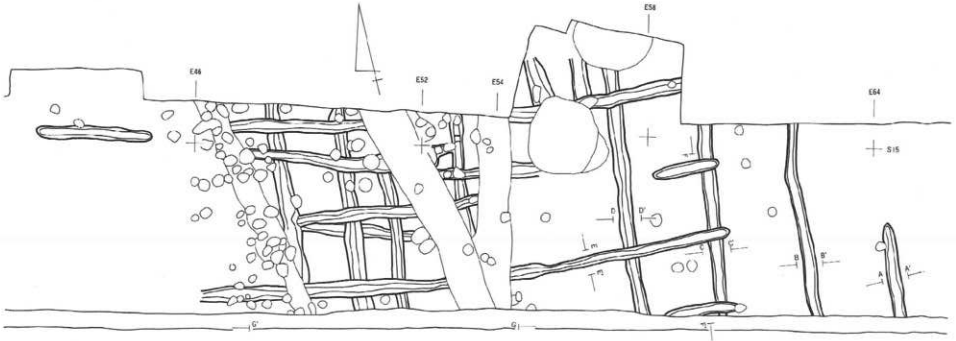
E28 グリットで検出された。SD18 溝跡は SK4.8 と重複し、すべてに切られている。方向は N－ 9°－W である。確認された長さは7.9m、上端幅2.8m、下端幅 1 m、深さ70cmである。断面形は開いた舟底形で、南に緩やかに傾斜している。堆積土は 2 層である。遺物は151点が出土し、図示できたのは土師器高坏 1 点、須恵器壷？ 1 点、石製模造品 2 点（円板形 1 、剣形 1 ）、磨石 1 点である。石製模造品の石材は、円板形が緑泥片岩製であり、剣形は滑石製である（第26図18～22）。



第31図　溝跡出土遺物⑥（SD17）



第32図　溝跡出土遺物⑦（SD17）



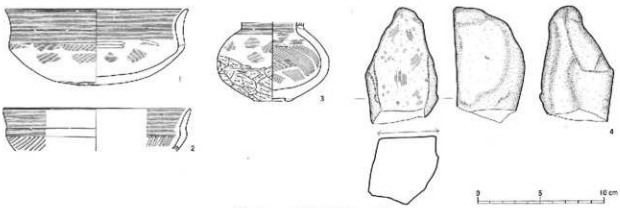
層位	土色		土性	備考
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	
2	灰黄褐色 に近い黄橙色	10YR4/2 10YR7/3	シルト	ブロック状に混在する。

第33図　小溝状遺構群平面図

小溝状遺構群

小溝状遺構群は、南区で検出されている。全体の切り合いから3時期の変遷が考えられる。(第33図)

E40～E64グリットで検出された。SI 2、ピット、SD 9・16、SE 1・2と重複し、ピット、SD 9・16、SE 1・2より古くSI 2より新しい。幅は多少の差はあるが、平均30cmである。深さは、E54以東は天地返しのため検出が下がっているところもあるが、平均20cmである。底面は部分的に落ち込む場所もあるが、全体として平坦であり、耕作にともなう痕跡のようなものは検出されなかった。堆積土は溝ごとに大きな違いはなく、2層認められ上層は灰黄褐色シルト、下層はそれと基本層の混在層である。時期差は溝の切り合いから、3段階の変遷が認められる。もっとも古いものは、E46グリッドにある東西方向の1本で、方向は、N－70°－Wである。次は南北方向の群で10本あり、方向はN－5°－Eである。もっとも新しいものは東西方向の群で4本ある。遺物は60点出土している。図示した遺物は土師器坏23点、壺1点、擦痕のある礫1点である。



第34図　小溝状遺構出土遺物

土坑

土坑は南区・北区合わせて13基検出されている。そのうち住居跡に伴うものであるSK 7・12は含めていない。

SK 1土坑（第37図）

E52グリットで検出された。SE 1と重複し、SE 1に切られる。残存する形から平面形は楕円形であると考えられる。確認できる上端長軸は1.1m、短軸0.4m、深さ18cmである。断面形は箱形で、堆積土は1層である。遺物は38点出土しているが、いずれも細片であり図示できるものはない。

SK 2土坑（第36図）

E46グリットで検出された。平面形は隅丸長方形で、長軸方向はN－22°－Eである。上端長軸1.68m、短軸1.32m、深さ55cmである。断面形は箱形で、壁は急である。堆積土は2層である。遺物は47点出土しているが、いずれも細片であり図示できるものはない。

SK 3土坑（第36図）

E34グリットで検出された。平面形は楕円形で、長軸方向はN－27°－Eである。上端長軸88cm、短軸72cm、深さ25cmである。断面形は舟底形で、堆積土は2層である。遺物は16点出土している。図示した遺物は、赤焼土器1点、滑石製臼玉1点である（第35図1・2）。

SK 4土坑（第36図）

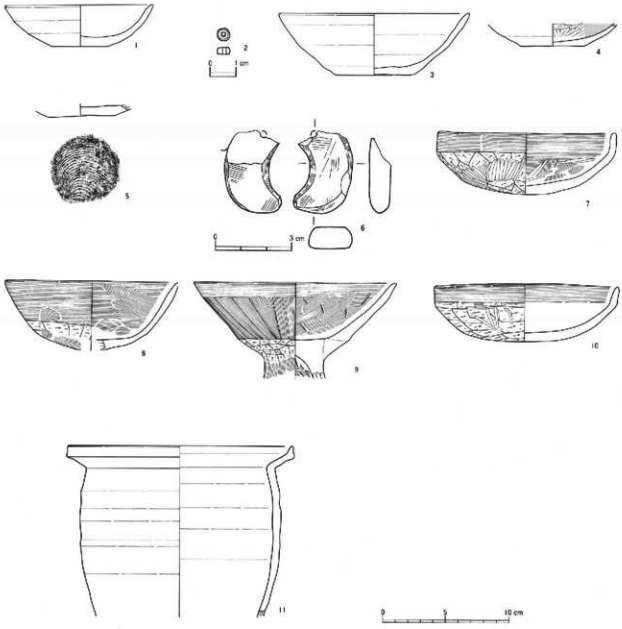
E28グリットで検出された。SK 8と重複し、これに切られる。残存する形から、平面形は隅丸長方形を呈するものと思われる。確認できる上端長軸は2.96m、短軸1.5m、深さ80cmである。断面形は途中に段を持つが、底面から緩やかに壁が立ち上がる。堆積土は5層である。遺物は100点出土しているが、いずれも細片であり図示できるものはない。

SK 5 土坑（第36図）

E40グリットで検出された。SI 2と重複し、SI 2を切っている。平面形は歪んだ形で、長軸方向は、N－83°－Wである。上端長軸、短軸、深さである。断面形は箱形である。堆積土は単層である。遺物は14点出土している。図示した遺物はロクロ使用の土師器坏1点、須恵器坏1点[note 27]である（第35図3・4）。

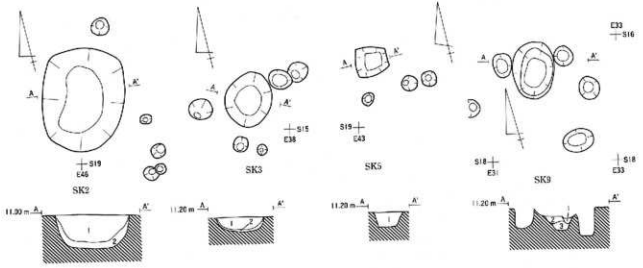
SK 6 土坑（第36図）

E22グリットで検出された。SD12と重複し、同時期と思われる。平面形は楕円形で、長軸方向はN－40°－Eである。上端長軸3.52m、短軸2.86m、深さ85cmである。断面形は逆台形で、堆積土は5層である。遺物は109点出土している。図示した遺物はロクロ調整の土師器坏である（第35図5）。



1～2 SK3　3～4 SK5　5 SK6　6 SK9
7～9 SK10　10 SK11　11 SK13

第35図　土坑出土遺物



層位	土色		土性
1	暗褐色	10YR3/3	粘土
2	黄褐色	10YR5/8	粘土

SK2　土層註記

層位	土色		土性
1	暗褐色	10YR3/3	シルト

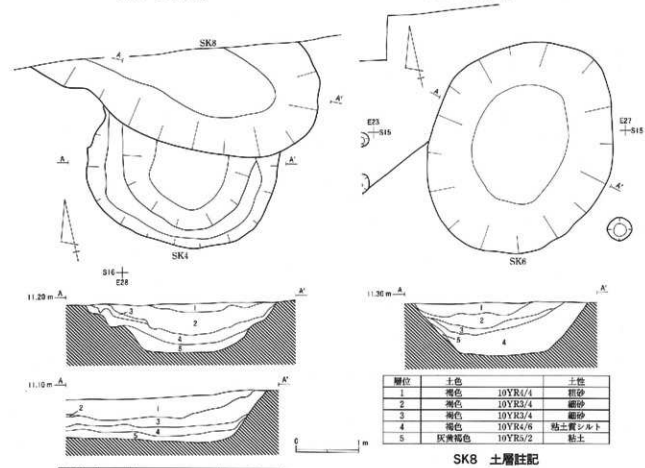
SK5　土層註記

層位	土色		土性
1	暗褐色	10YR3/3	シルト
2	褐色	10YR4/6	シルト

SK3　土層註記

層位	土色		土性
1	褐色	7.5YR4/4	シルト
2	黄褐色	10YR5/8	シルト質粘土
3	褐色	10YR4/6	シルト質粘土

SK9　土層註記



層位	土色		土性
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	細砂
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	細砂
3	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト

SK4　土層註記

層位	土色		土性
1	褐色	10YR4/4	細砂
2	褐色	10YR3/4	細砂
3	褐色	10YR3/4	細砂
4	褐色	10YR4/6	粘土質シルト
5	灰黄褐色	10YR5/2	粘土

SK8　土層註記

層位	土色		土性
1	褐色	10YR4/6	細砂
2	褐色	7.5YR4/4	細砂
3	暗褐色	7.5YR3/3	シルト
4	暗褐色	10YR3/3	シルト
5	黄褐色	10YR5/8	細砂

SK6　土層註記

第36図　土坑平面図・断面図

SK 8 土坑（第36図）

E38 グリットで検出された。SK 4、SD12 と重複し、SK 4 を切っている。SD12 とは同時期と思われる。平面形は調査区外へ延びているため詳細は不明である。確認できる上端長軸は2.9m、短軸1.68m、深さ75cmである。堆積土は5層である。遺物は16点出土しているが、いずれも細片であり図示できるものはない。

SK 9 土坑（第36図）

E28 グリットで検出された。平面形は隅丸長方形で、長軸方向は N－23°－E である。上端長軸74cm、短軸49cm、深さ24cmである。断面形は箱形で、堆積土は3層である。遺物は4点出土している。図示した遺物は滑石製の石製模造品（勾玉形）である（第35図6）。

SK10 土坑（第6図）

北区で検出された。平面形は調査区外へ延びているため詳細は不明である。確認できる上端長軸は84cm、短軸64cm、深さ43cmである。断面形は調査区壁面で確認できる限り擂り鉢状を呈している。堆積土は2層である。遺物は31点出土している。図示した遺物は土師器坏2点、高坏1点である（第35図7～9）。

SK11 土坑（第6図）

北区で検出された。ピットと重複し、これに切られている。平面形は楕円形で、長軸方向は N－28°－E である。上端長軸92cm、短軸76cm、深さ38cmである。断面形は U 字形で、堆積土は3層である。遺物は8点出土している。図示した遺物は土師器坏である（第35図10）。

SK13 土坑（第6図）

北区で検出された。SI 7 と重複し、これを切っている。平面形は上層からの撹乱があるが、ほぼ楕円形を呈しているものと思われる。長軸方向は N－73°－W である。確認できる上端長軸は72cm、短軸56cm、深さ22cmである。遺物は35点出土している。図示した遺物はロクロ調整の土師器甕1点である（第35図11）。

井戸跡

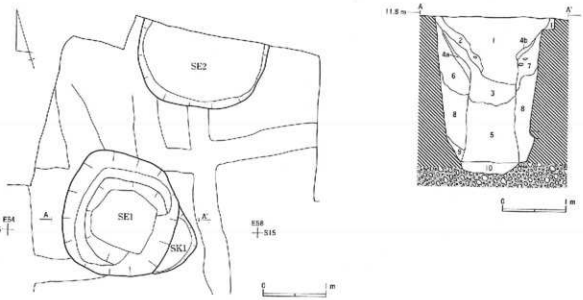
井戸跡は南区で2基検出されている。

SE 1 井戸跡（第37図）

E52 グリットで検出された。小溝遺跡と重複し、これらを切っている。径2 m のほぼ円形の掘り方の中央に、一辺約70cmの方形の井戸組みを有している。上部は既に消失し、枠材となるようなものも検出できなかったが、掘り方埋め土が内部まで混入していないことから枠組みなどの施設が存在していたものと思われる。深さ約2.5m で礫層に達している。堆積土は10層に分けられ、4 a、4 b、6～9 層は掘り方埋め土で、1～3、5 層は井戸内堆積土である。1～3 層は人為的に一時期に埋め戻された様相を呈している。遺物はおもに5 層から出土しているが、いずれも細片であり図示できるものはない。

SE 2 井戸跡（第37図）

E52 グリットで検出された。小溝遺構と重複し、これより新しい。北半部は調査区外であるが、平面形は径2 m の円形を呈するものと思われる。深さは、約1.4m で垂直に掘られており、底面は平坦である。掘り方埋め土はなく素掘りの井戸と考えられる。壁面が崩落し危険であったため、断面図の作成は断念している。遺物は、48点出土しているが図示できるものはない。



SE1　土層註記

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR3/4	粘土	一度に埋め戻された土と思われる。10YR2/3をブロック状に混入する。
2	黒褐色	10YR2/3	粘土	
3	褐色	10YR4/6	粘土	上位2層よりは粘性が強い
4 a	黒褐色	10YR3/1	粘土	
4 b	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	
5	黒褐色	10YR2/2	粘土	
6	褐色	10YR4/6	粘土	井土橋築時に埋め戻したと考えられる（掘り方埋土？）
7	褐色	10YR4/6	粘土	井土橋築時に埋め戻したと考えられる（掘り方埋土？）
8	褐色	10YR4/4	粘土	井土橋築時に埋め戻したと考えられる（掘り方埋土？）
9	にぶい黄褐色	10YR5/3	粘土質シルト	井土橋築時の崩落土か？
10	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土	井土使用時に自然堆積したものと思われる。

第37図　井戸跡平面図・断面図

ピット（第38図・第１・２表）

ピットは南区、北区でそれぞれ検出されている。堆積土は両区では違いが認められる。なかには柱痕が認められるものもあるが、明確に組み合うものは確認されなかった。各ピットの堆積土、出土遺物については、一覧表にしてある。

南区

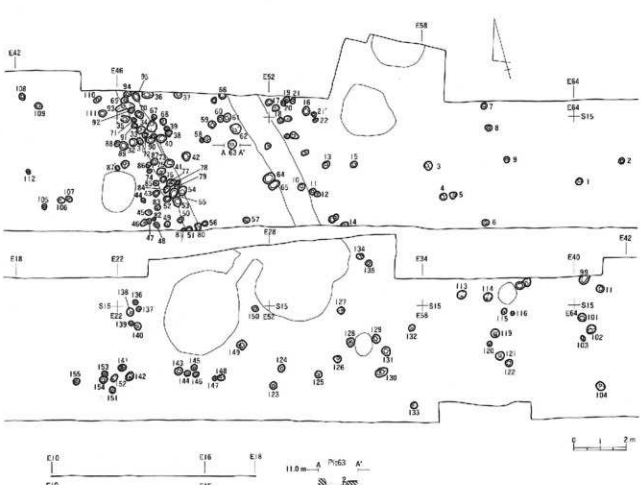
南区のピットは、E10グリットからE64グリットにかけてピットが検出され、全部で159基である。他のすべての遺構を切っている。E64、E52グリッドに特に多く分布している。西部にあるピットには柱痕が検出されるものもあるが、その外大多数は柱痕が検出されない。いずれも建物跡を構成する柱の跡と考えられるが、調査区が狭いため建物跡を復元することはできなかった。

E46グリッドのピットには堆積土に灰白色火山灰がブロック状に混じるものが認められ、特にピット55とピット63は、上半部に火山灰が詰まった状況であった（写真図版４－２）。これらの火山灰については、分析同定を行っている（第Ⅵ章）。

北区

北区のピットは、24基検出されている。他のすべての遺構を切っている。中には柱痕の確認されるものも認められるが、組み合うものはない。

遺物は201点が出土している。弥生土器以外では図示できるものはない。



P63　土層註記

層位	土色		土性	備　考
1				灰白色の火山灰
2	にぶい黄色	2.5Y6/4	細砂	火山灰わずかに混入する。
3	にぶい黄色	2.5Y6/4	細砂	褐色、火山灰ブロック（φ1cm 大）を混入する。
	黄色	2.5YR8/6	細砂	

第38図　南区ピット配置図

E76グリッドチップ群（第41図）

E76グリッドの深掘りの途中で、剥片が分布しているのが確認された。礫層直上の淡黄色中砂層中に主に赤色の石材による剥片が径約1ｍの範囲に分布していた。中央部には60×40cmの範囲に微細な炭片の混じる層が広がり、その3cmほど下にはごく弱い焼け面が認められた。剥片の石材は、大部分が赤色の鉄石英であり、1点のみ頁岩である(☆)。明確に加工痕跡のあるのものは頁岩製のものだけで、他は石器製作途中に出きる剥片と思われる。土器は出土していないため、遺物の時期を判断できない。

東区の調査（第39図）

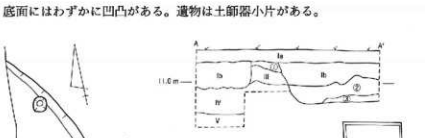
東区は幅3ｍ、長さ19mの大きさに設定した。畑土および天地返し土は厚さ70cmに及び、その下の砂層上面で遺構が検出された。基盤の砂層は南東方向に下がっている。

遺構は北端部でピットが4基検出された。いずれも切りあっている。ピット1は80×60cmの楕円形で、深さ35cm、

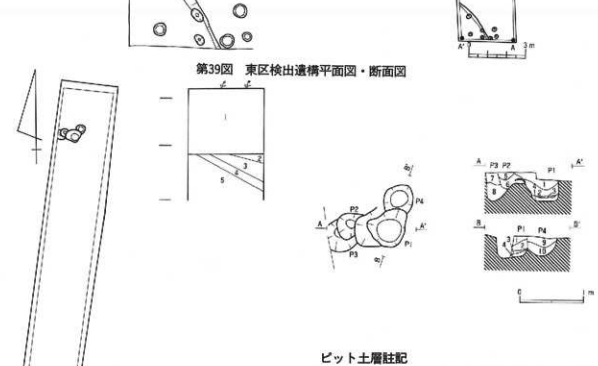
ピット２は径40cm程で、深さ60cm、ピット３は径50cm程で深さ50cm、ピット４は径50cm程で深さ30cmである。遺物はピット２より土師器が出土している。

北Ｂ区の調査（第40図）

北Ｂ区は北区の東に３×３ｍの大きさに設定した。基本層は北区と同じである。天地返しで削平された３層の上面でピットと落ち込みが検出された。ピットは２基あり、いずれも浅い。落ち込みは調査区が狭いため全体は不明だが、深さ20cm程で、底面にはわずかに凹凸がある。遺物は土師器小片がある。



第39図　東区検出遺構平面図・断面図



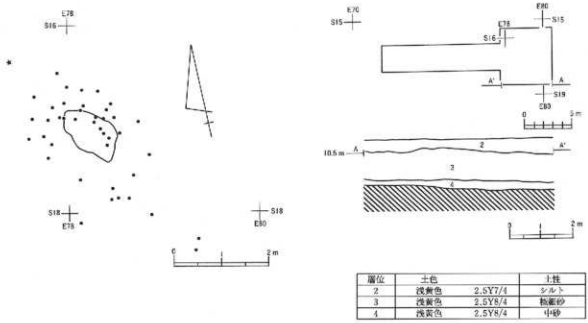
ピット土層註記

ピット番号	層位	土色		土性	備　考
1	1	にぶい黄橙色	10YR6/3	細砂	炭化物を混入する。
	2	にぶい黄橙色	10YR7/4	細砂	シルトを混入する。
	3	灰黄褐色	10YR6/2	細砂	シルトを混入する。
	4	にぶい黄橙色	10YR7/4	細砂	シルトを混入する。
2	5	にぶい黄橙色	10YR5/3	細砂	炭化物を混入する。
	6	にぶい黄橙色	10YR6/4	細砂	シルトを混入する。
3	7	にぶい黄橙色	10YR5/4	細砂	シルトを混入する。
	8	にぶい黄橙色	10YR6/4	細～中砂	シルトを混入する。
4	9	にぶい黄橙色	10YR5/4	シルト	下部に粗砂。シルトブロックを混入する。
	10	にぶい黄橙色	10YR5/3	細～中砂	炭化物を混入する。

基本層 層位	土色		土性	備　考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	現耕作土と天地返し土
2	明黄褐色	10YR6/6	極細砂	
3	にぶい黄褐色	10YR5/4	中砂	
4	明黄褐色	10YR6/6	極砂	
5	にぶい黄褐色	10YR5/3	中砂	
	にぶい黄褐色	10YR7/3	細砂	縞状堆積
	灰黄褐色	10YR5/2	中砂	径5cm以下の縞が部分的に堆じる。

北Ｂ区検出遺構　土相註記

第40図　北Ｂ区検出遺構平面図・断面図

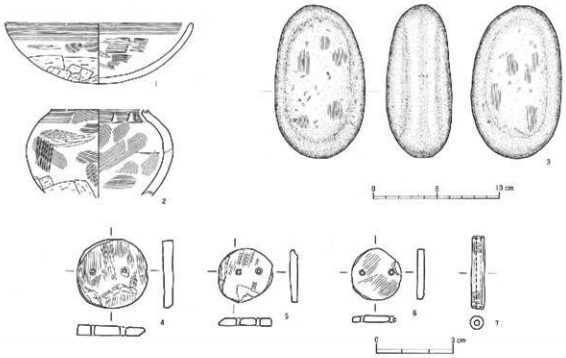


層位	土色		土性
2	浅黄色	2.5Y7/4	シルト
3	浅黄色	2.5Y8/4	粘質砂
4	浅黄色	2.5Y8/4	中砂

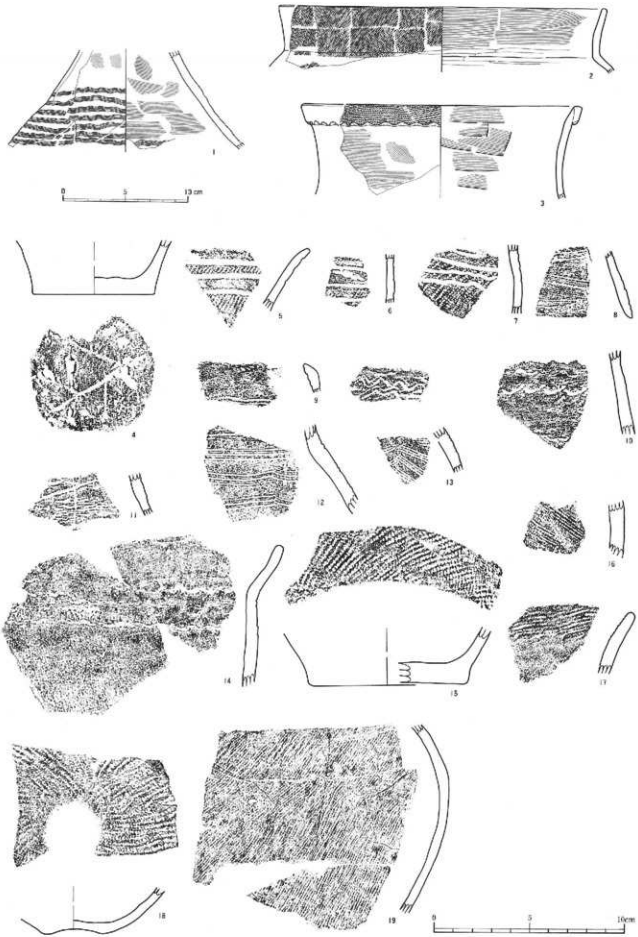
第41図　E76グリッドチップ集中箇所平面図

2　その他の出土遺構

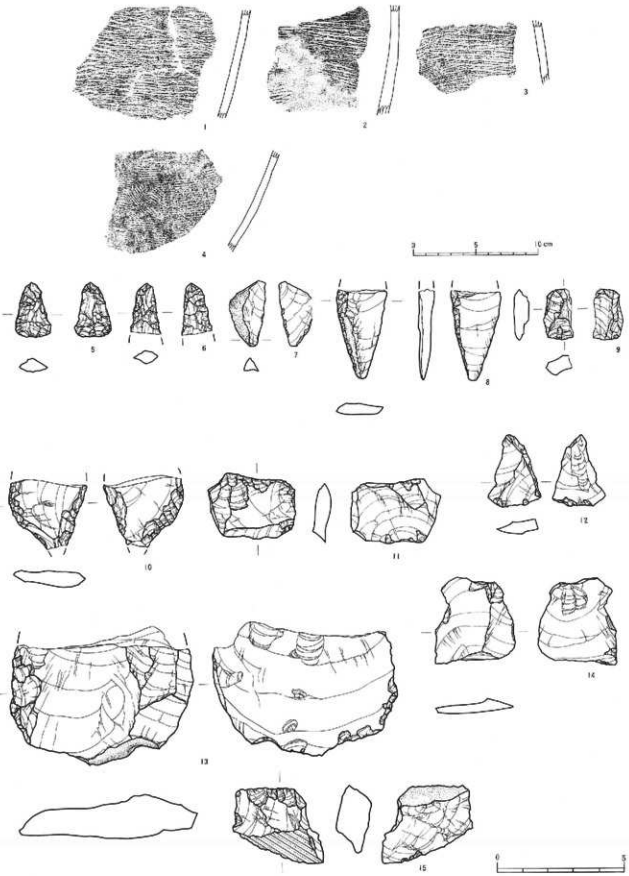
遺構に伴わず基本層中から土師器や須恵器、陶磁器、石器などの遺物が出土しているが、そのほとんどはⅠ層中からであり耕作等によって下層のものが巻き上げられたものと考えられる。そのため、細片や摩滅したものが多く図示できたものは少ない。また、Ⅲ層中からは、弥生土器や石器などが出土しているが、器形の復元できたものは少ない。図示したものは土師器坏（第42図１）・壷（第42図２）、両面に擦痕の認められる礫（第42図３）、円板形石製模造品（第42図４～６）、管玉（第42図７）、弥生土器（第43図・44図１～４）、石器（第43図５～15・45図・46図）



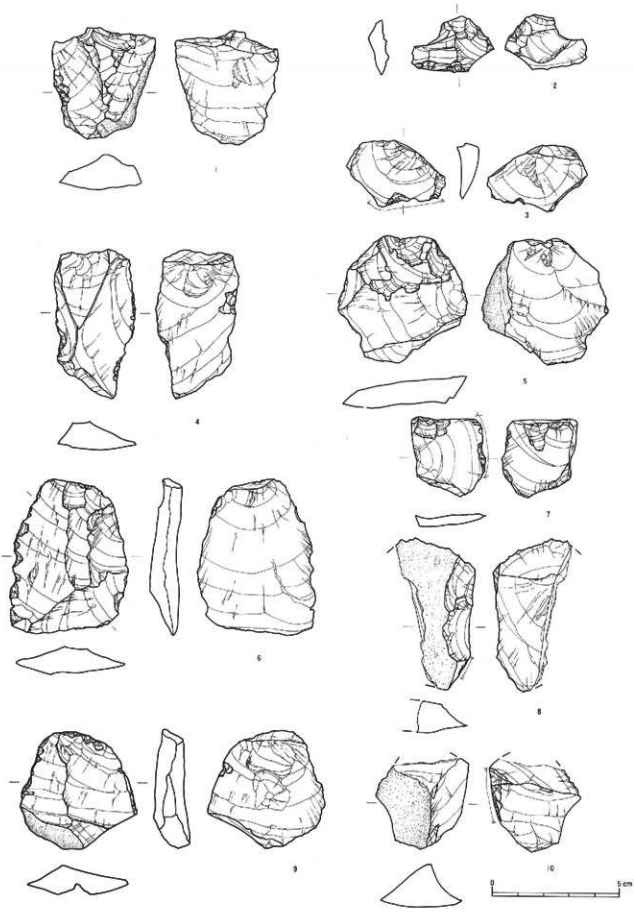
第42図　基本層出土遺物



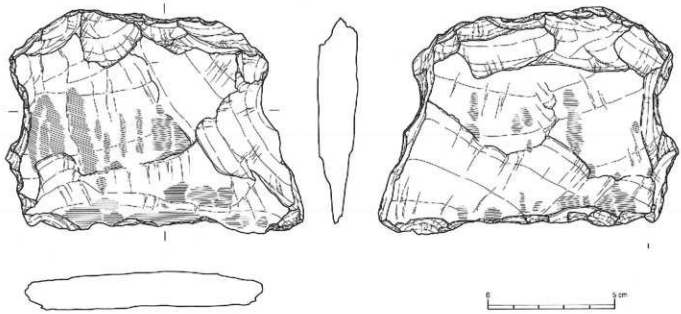
第43図　基本層出土遺物



第44図　基本層出土遺物



第45図　基本層出土遺物

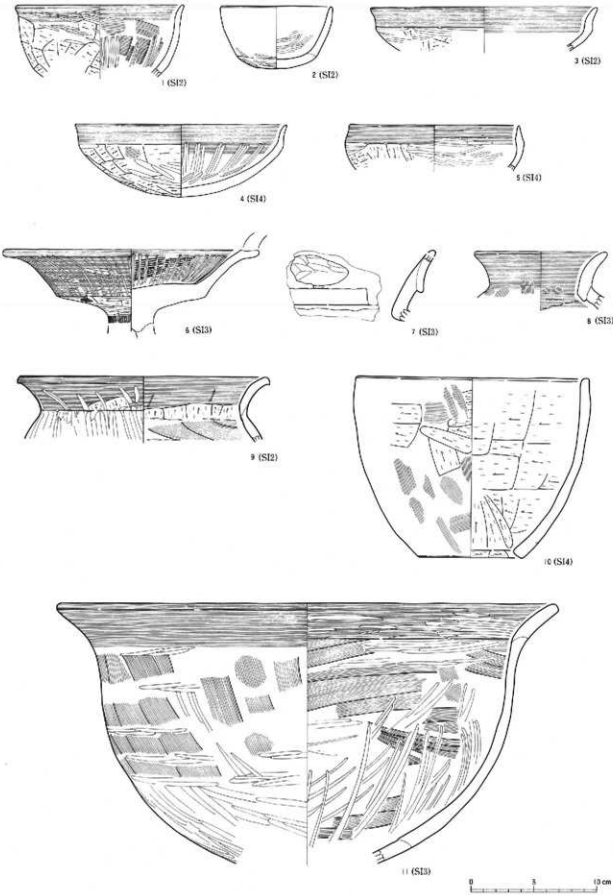


第46図　基本層出土遺物

である。弥生土器は器形が復元できるものは盖（第43図１）、甕（第43図２・３）で、他は底部及び体部資料である。第43図５以下に示した石器は、石鏃・石錐・ピエス・エスキーユ、連続した二次加工や微細剥離痕の見られる剥片である。これらの石材には流紋岩・玉髄・安山岩などが見られる。第46図に図示した石器は、粘板岩製で節理に沿って剥離された鋭い縁辺部を刃部として利用した石器と考えられる。上縁部には、背腹両面からの二次加工が施されており下縁部を刃部として機能させていたものとみられるが、縁辺に平行する研磨痕が剥離によって切られているので、本来の刃部は一回り大きいものと思われる。刃部は直縁をなすものと思われ、両面中央部や刃部には研磨痕が認められる。また、刃部付近に肉眼で観察できる薄い光沢が認められる。左右両側縁には、抉りが作り出されている。このように大型で、直線的な刃部を持つものとして大型直縁刃石器（斎野：1993）が知られている。特に富沢遺跡で多く出土している大型板状安山岩製石器と形態的に似ているが、名称が示すようにこれは安山岩製の石器であり、今回のように粘板岩を素材とするものは福島県原町市南入Ａ遺跡（井他：1994）、鹿島町天神沢遺跡（竹島：1983）などに見られる。また、素材を異にするが名取市野田山遺跡（須田：1992）でもこのような形態を持つものが報告されている。従って大型直線刃で両側縁に抉りを有し、しかも粘板岩を素材とする石器は仙台市内では初めての出土である。この石器の機能としては、使用痕の分析を行っていないので断定はできないが、光沢面が認められることからイネ科植物の切断に使用された可能性が高いと言えよう。

注１）　蟹沢教授の御教授による。

注２）　ここで須恵器とした土器は、最近出土例の報告が多く見られるようになった土器で、一般的に須恵器と言われているように青灰色を呈し堅く焼き締ったものではなく、色調が灰白色を呈し焼きのもろい土器である。このような土器は、安久東遺跡（土岐山：1980）、三神峯地区原子核研究施設地点（大場：1990）、海ノ巣遺跡（荒井：1991）などから出土している。また多賀城遺跡第61次調査鴻ノ池地区10層から出土したものにも集例が認められる。（報告までは非内グロ、同転糸切り無調整の土師器で、灰白色を呈するものとしている。（村田：1994））他にも同様の土器を示すものとして、赤焼き土器の中に含めているが色調が灰白色を呈する土器と言う名称などで呼称されてきているものである。１点だけの資料でもあり、この土器がこれら一群の土器と同様のものであると断定はできないが、従来の須恵器とは色調も焼きも違う点だけを特徴としておきたい。



第47図　第24次調査出土遺物

VI 火山灰分析

古環境研究所

1．はじめに

仙台市南小泉遺跡の発掘調査では、ピットや溝の覆土から火山灰が検出された。そこで担当者により記載採取された試料を対象に屈折率測定を行って、噴出年代の明らかな示標テフラとの同定を行い、遺構の構築年代に関する資料を収集することになった。

2．屈折率測定試料と測定方法

屈折率測定の対象となった試料は、ピット63、ピット55、SD 9 溝跡（2層）、SD16 溝跡（1層）の4遺構から採取された4試料である。これらの試料について位相差法（新井、1972）により屈折率の測定を行った。

3．屈折率測定結果

屈折率測定の結果を表1に示す。ピット63の試料には、ごくわずかに斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱が認められる。軽石型の火山ガラスは多く含まれており、その屈折率（n）は1.505-1.509（mode:1.506-1.508）である。ピット55の試料にも、ごくわずかに斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱が認められる。軽石型の火山ガラスは多く含まれており、その屈折率（n）は1.506-1.509である。SD 9 溝跡の2層にもほかの試料と同様にごくわずかに斜方輝石、角閃石、磁鉄鉱、単斜輝石が認められる。軽石型の火山ガラスは多く含まれており、その屈折率（n）は1.505-1.509である。さらにSD16 溝跡の1層にも、斜方輝石、単斜輝石、角閃石、磁鉄鉱が含まれている。この試料には軽石型の火山ガラスが比較的多く含まれており、その屈折率は1.499-1.505である。

4．考察

屈折率測定の結果、SD16 溝跡の1層中に含まれる火山灰は、火山ガラスの形態や屈折率などから915年に十和田火山から噴出した十和田 a 火山灰（To-a、火山ガラスの屈折率：1.496-1.504、町田ほか，1981）に由来するものと考えられる。したがって SD16 溝の構築年代については、915年を遡る可能性が考えられる。一方その他3試料については、火山ガラスの形態および屈折率に一致した特徴が認められ、同一テフラの可能性が大きいと考えられる。この火山ガラスについて、火山ガラスの形態と屈折率だけで見るならば、従来仙台市との周辺地域に分布するテフラの中では約1.2-1.3万年前に十和田火山から噴出した十和田八戸テフラ（火山ガラスの屈折率：1.502-1.509，町田・新井，1992）の特徴にほぼ一致する。しかしこれでは、発掘調査の成果から推定される遺構の年代と大きく食い違うものと思われる。

最近、従来「灰白」と呼ばれてきた火山灰で、To-a と同一テフラと考えられているもの（町田ほか，1981）の中に、火山ガラスの屈折率が To-a と一致しないものが数地点で認められている（古環境研究所，未公表資料）。しかし同じような特徴を持つものが同一地点において複数認められた例はまだない。もしも異なるテフラがほぼ同じ年代に降灰したとすれば、泥炭層などテフラの保存条件のよい地点において、特徴を異にする一次堆積層が複数認められるはずである。

今回ピット63、ピット55、SD 9 溝跡（2層）の3遺構で検出された火山ガラスの最大径は0.3㎜ほどで、確実に To-a 起原と考えられる SD16 溝跡（1層）の火山ガラスの最大径0.9㎜と異なる傾向があり、To-a とは異なるテフラのようにも思われる。今後、仙台市域における詳細な編年研究を行うために、さらに資料を収集して、この問題

に取り組んでいく必要がある。

5．まとめ

仙台市南小泉遺跡において採取された4試料について、屈折率測定を行った。その結果、SD16溝跡の1層中に十和田a火山灰（To-a，915年）起原の火山ガラスが比較的多く認められた。またそのほかの3試料にも、火山ガラスが多く認められた。しかしこれらのテフラについては、火山ガラスの屈折率の点において、To-aと異なる傾向が伺えた。仙台市とその周辺には、火山ガラスを多く含む凝灰質の基盤岩や火山ガスを多く含むテフラの存在が知られている。このような地域において、分析のみで編年研究に有効な一次堆積のテフラを検出することは困難である。編年研究に利用できる一次堆積のテフラの検出のめたに、まず野外において地質調査を行いテフラの堆積の様子を観察確認した後に分析を行う必要がある。

文献

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.

南小泉遺跡の屈折率測定結果

遺構（土層）	重鉱物	火山ガラス		
試料	形態	屈折率（n）		
ピット63 (1.505-1.508)	(opx，cpx，mt)	−−＋	pm	1.505-1.509
ピット55	(opx，cpx，mt)	＋＋＋	pm	1.506 1.509
SD 9 溝跡（2層）	(opx，ho，mt，cpx)	｜｜＋	pm	1.505-1.509
SD16 溝跡（1層）	(opx，cpx，ho，mt)	｜＋	pm	1.499-1.505

屈折率測定は、位相差法（新井，1972）による。重鉱物の（ ）は、量の少ないことを示す。opx：斜方輝石、cpx：単斜輝石、ho：角閃石、mt：磁鉄鉱。＋＋＋：とくに多い、＋＋＋：多い、＋＋：中程度、＋：少ない、−：認められない。pm 軽石型。

No.	位置	土色	出土遺物
1	E64	B	
2	E65	D	
3	E58	D	
4	E58	B	石製品1
5	E59	C	
6	E60	B	
7	E60	D	
8	E60	B	
9	E61	D	
10	E53	D	土師器2
11	E53	C	
12	E53	C	
13	E54	D	
14	E54	B	
15	E55	B	
16	E53	−	土師器1
17	E52	A	
18	E52	B	
19	E52	B	
20	E52	B	
21	E52	−	
21'	E53	D	
22	E53	B	
23	E52	B	
24	E52	B	
25	E52	B	
26	E52	D	
27	E53	C	
28	E54	B	
29	E54	B	
30	E46	D	土師器3
31	E46	B	土師器8　弥生1
32	E46	B	
33	E46	B	土師器1
34	E47	A	
35	E46	D	
36	E47	B	
37	E48	A	
38	E48	C	
39	E47	C	
40	E47	C	石製品1
41	E48	A	土師器4
42	E48	A	
43	E47	B	土師器2
44	E46	D	
45	E47	D	土師器3
46	E47	B	土師器5
47	E47	A	
48	E47	B	
49	E48	B	土師器5
50	E48	B	石製品1
51	E48	B	
52	E47	D	土師器2、弥生1
53	E48	A	
54	E48	B	
55	E48	A	土師器23、弥生13、石製品1
56	E49	B	
57	E51	D	
58	E49	A	
59	E49	D	土師器1
60	E50	C	
61	E50	A	
62	E50	A	
63	E50	A	
64	E51	D?	
65	E52	D?	
66	E50	B	
67	E47	D	
68	E48	A	土師器1
69	E46	D	土師器4
70	E46	B	
71	E46	B	土師器1、弥生1
72	E47	B	弥生1
73	E47	B	
74	E47	B	土師器
75	E47	B	土師器3、弥生1、石製品1
76	E47	B	土師器2
77	E48	A	土師器4
78	E48	A	弥生1
79	E48	A	弥生2
80	E49	B	土師器2
81	E48	C	
82	E47	−	
83	E47	−	
84	E47	B	
85	E47	B	
86	E47	D	
87	E47	D	
87'	E45	−	
88	E45	B	
89	E46	B	
90	E47	B	
91	E46	B	
92	E46	D	
93	E46	B	
94	E46	A	
95	E46	C	
96	E49	B	
97	E49		
98	E51	D	
99	E40	B	土師器4
100	E41	B	
101	E40	C	土師器3
102	E40	B	土師器2
103	E40	C	
104	E40	B	
105	E43	B	土師器1
106	E43	B	土師器1
107	E44	B	
108	E42	B	
109	K43	C	土師器2
110	E42	B	
111	E43	C	
112	E42	−	
113	E35	E	土師器2
114	K36	E	土師器1、鏃1
115	E37	E	土師器3
116	K37	E	
117	E37	D	石製品1
118	K38	B	
119	E36	E	
120	K36	E	
121	E37	E	
122	K37	E	
123	E28	E	
124	E28	E	
125	E30	E	土師器1
126	E30	E	
127	E30	E	
128	E31	E	
129	E32	E	土師器2
130	E32	E	土師器5
131	E32	E	土師器1
132	E33		土師器1
133	E33	E	
134	E31	E	
135	E31	E	
136	E22	E	
137	E22	E	
138	E22	E	土師器1
139	E22	E	
140	E22	E	土師器3
141	E22	E	
142	E22	E	土師器6
143	E24	E	土師器4
144	E24	E	土師器8
145	E25	E	土師器1
146	K25	E	
147	E25	E	土師器1
148	K26	E	
149	E26	−	土師器2
150	K27	−	
151	E21	E	
152	K21	K	
153	E21	E	
154	K21	K	
155	E20	−	
156	E14	C	土師器1
157	E14	E	土師器4
158	E15	E	土師器4
159	E15	E	

南区ピット土層註記

	土色	土性	備考
A	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト	灰白色・火山灰のブロックが混じる。
B	褐灰色	10YR4/1	砂質シルト	10YR8/6砂質シルトブロックを含む。
C	黄橙色	10YR8/6		10YR4/1砂質シルトをブロック状に含む。
D	褐灰色	10YR4/2	砂質シルト	
E	灰黄褐色	10YR5/2	細　砂	10YR8/6黄橙細砂をブロック状に含む。

第1表　南区ピット集計表

No.	位置	土色	出土遺物	No	位置	土色	出土遺物	No.	位置	土色	出土遺物
160	E57	A		168	E61	C		176	E62	A	土師器 3
161	E57	A	土師器 1	169	E62	D	土師器 7	177	E63	B	
162	E58	D	土師器 3、陶器 1	170	E61	B		178	E63	B	
163	E58	B	土師器(ロクロ) 9、石製品 1	171	E60	B		179	E63	A	
164	E59	C	土師器 4	172	E57	D		180	E58	B	
165	E59	C	土師器 2	173	E58	D		181	E58	A	
166	E60	A		174	E57	B		182	E62	A	
167	E61	A		175	E60	A		183	E63	B	
								184	E63	A	

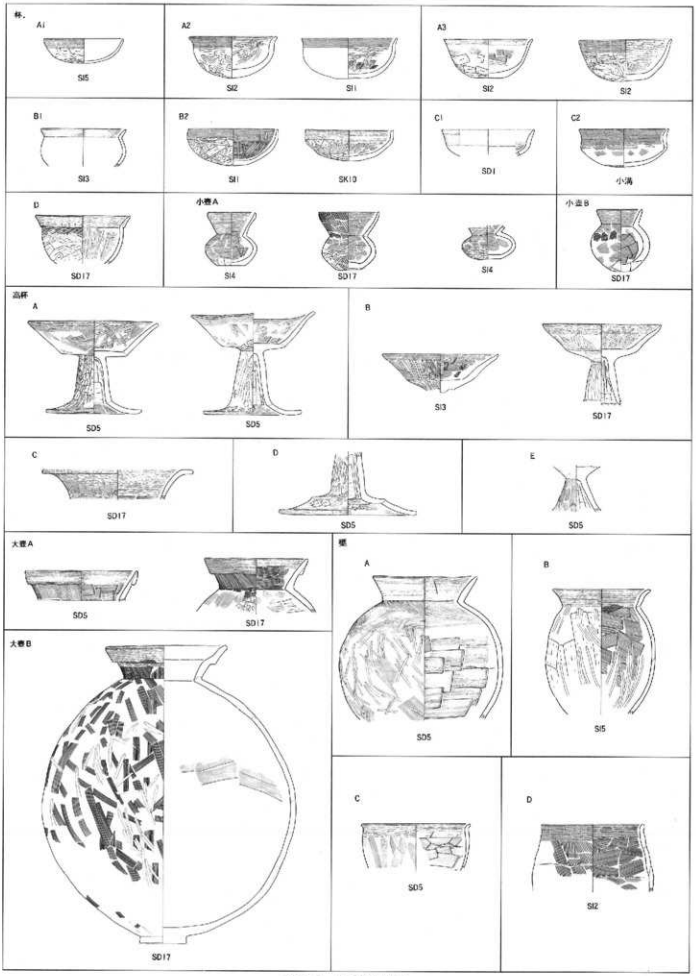
	土色		土性	備考
A	黒褐色	10YR3/2	シルト	10YR4/6 をブロック状に含む。
B	褐色	10YR4/6	シルト	10YR3/2 をブロック状に含む。
C	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	10YR3/3 をブロック状に含む。
D	暗褐色	10YR3/3	シルト	

第2表　北区ピット集計表

	遺跡名	弥生	土師器		須恵器	石		瓦	陶器	磁器	その他
			ロクロ	非ロクロ		石製品	礫				
(住居跡)	SI1			356	5	21	3				赤焼土器 2
	2	1		690	1	7	3				
	3		13	78			3				
	4			445	1	7	3				鉄さい 1
	5			240	11	14	4				
	6		83	1	1						
	7		10	45							
	計	1	23	1927	18	50	17				赤焼土器 2 鉄さい 1
(溝跡)	SD1	4		51	2	3	8				
	2	6		192	9	4	1	1	13		
	3			10	1				1		
	5			1776	1	9	26				赤焼土器 2
	6			8							
	7			35							
	9	2		18							
	10			67	2						
	11			56	3						
	12			1			1				
	13			297	8	3	1		1		かわらけ 1
	14			124	4			1			赤焼土器 1
	15			18			1				赤焼土器 1
	17		6	1307	6	3	1				土玉 2 赤焼土器 2
	18	2		129	2	2	3		1		かわらけ 1 赤焼土器 10
	計	14	6	4089	38	24	42	2	16		かわらけ 2 赤焼土器 10 土玉 2

	遺跡名	弥生	土師器		須恵器	石		瓦	陶器	磁器	その他
			ロクロ	非ロクロ		石製品	礫				
(土壙)	SK1		2	25	5		2	3			赤焼土器 1
	2	3	26	12		3			2		鉄製品 1
	3		3	11		1	1				
	4		4	65	7		1		1		赤焼土器 2
	5		2	10	2						
	6	1	2	95	10						かわらけ 2
	7			21	1						
	8			15	1						
	9			3		1					
	10			31							
	11	1		7							
	13		25	9	1						
	計	5	64	324	27	5	4	3	3		赤焼土器 3 鉄製品 1 かわらけ 2
(井戸跡)	SE1			51	5		1				
	2			29	8						不明土製品 1
	計			80	13		1				
(小溝)	小溝状遺構			25							
(ピット)	ピット	21		174	1	5					
(基本層位)	基本層位	143	41	1749	12	134	36	2	12	4	赤焼土器 2 骨片 1
(SK)		234	1	335	2	20	30		1		
(カクラン)				287	12				10	3	鉄製品 4
	総合計	184	134	8655	121	218	100	8	42	7	赤焼土器 19 鉄さい 1 かわらけ 4 土玉 2 鉄製品 3 不明土製品 1 骨片 1

第3表　遺構別出土数量表


杯
A1
SI5
A2
SI2
SI1
A3
SI2
SI2
B1
SI3
B2
SI1
SK10
C1
SD1
C2
小溝
D
SD17
小壺A
SI4
SD17
SI4
小壺B
SD17
高杯
A
SD5
SD5
B
SI3
SD17
C
SD17
D
SD5
E
SD5
大壺A
SD5
SD17
大壺B
SD17
壺
A
SD5
B
SI5
C
SD5
D
SI2

第48図　土師器土類図

Ⅶ 考　察

今回の調査では、古墳時代から中世にかけての竪穴住居跡、溝跡、小溝状遺構群、土坑などを検出している。遺物は遺構を中心に弥生時代から近世にかけてのものが出土している。特に竪穴住居跡やSD 5・17からは、古墳時代中期の遺物がまとまって出土している。しかし、これら以外では摩滅したものや細片が多く器種等を限定できなかったものも多く見られた。以下では、遺物と遺構について遺物から検討を加えていくこととする。

1．遺物について

遺物は、土器、陶磁器、石器、石製模造品、土製品などが出土している。ここでは、土器、石製模造品について検討する。

1）土器

土器には弥生土器、古墳時代から平安時代の土器がある。弥生土器は基本層Ⅲ層を中心に出土し、器種が分かるものでは壺・甕・蓋がある。古墳時代の土器は中期のものが竪穴住居跡、溝跡、土坑を中心に最も多く出土している。須恵器や平安時代の土器については出土量が少ないので今回の検討からは省くこととする。

[弥生土器]

弥生時代の遺構は検出されなかったが、弥生土器は基本層中や竪穴住居の掘り方埋土などから出土している（第43図、44図1～4）。

第43図1は蓋で、上部と口縁部を欠損している。外面に同時施文具による3本平行沈線で描かれた7条の波状文を施し、内面にも1条の波状文を施している。時期は、中期後葉の十三塚式期頃であろう。

第43図3は壺の口縁で、複合口縁である。口縁部下端に連続した指頭による押圧が認められ、他は擬糸Rの地文を施すものである。時期は天王山式のものよりは後出のものと思われ、後期後半と考えられる。

第43図5～7は沈線で区画した後に縄文を充填する施文方法で、このような方法は弥生時代中期頃にみられる手法である。5・6は沈線の幅が3㎜ほどで深くはっきりしたものであり、7は幅が1㎜ほどで浅く細いものである。沈線の幅が細いものは中期中葉の桝形囲式期頃に多く見られるので、7はこの時期に所属するであろう（須藤：1990）。5・6は、桝形式期以前であろう。

第43図14は壺の口縁部から体部にかけての破片であるが頸部に補修孔が認められる。

他にも壺の底部や壺の体部などの破片が多く見られるが、いずれも擬糸や綾絡文などの地文のみで所属時期が限定できないものである。

[古墳時代中期の土師器]

古墳時代の遺物は竪穴住居跡、溝跡、土坑などから出土し、なかでも古墳時代中期に属すると考えられる土師器が最も多く出土し、特に多いのはSD 5・17である。SD 5と17では出土状況に若干違いが認められ、これらの違いについては遺構の項で述べることとする。器種としては坏、高坏、椀、甕、鉢などがあり、以下では器種毎に分類し、その特徴を述べていくことにする。

坏

坏は全部で37点が図示できた。口縁部、体部の特徴から以下の4類に分類でき、細部の違いから細分される。

A類：口縁部がくびれて外反するもので、体部の違いから以下の3類に細分される。

A1類：口縁部がくびれて外反するもので、内外面に稜がつくものである。体部は緩やかに丸味を持つものと、肩の張るものとがあり、底部が現存するものでは上げ底である。

A2類：口縁部がくびれて外反するものであるが、B1類のものよりは弱く内外面の稜ははっきりしないものである。

A３類：口縁がくびれわずかに外反し、体部全体が外傾するものである。底部は平底である。

B類：体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がるもので、口縁部の違いから以下の２類に細分される。

B１類：体部から口縁部まで丸味を持って立ち上がり、大きな変化のないものである。底部は丸底である。

B２類：口縁部が直立するもので、内外面の稜が明瞭なものは少ない。体部は直線的に外傾するものとやや丸味を持つものとがある。底部が現存するものでは、平底風の丸底と上げ底のものがある。

C類：口縁部が直立するもので、体部の違いから以下の２類に細分される。

C１類：体部は直線的に外傾し、さらに口縁部は直立気味に外反する。内外面の稜はあまり明瞭ではない。

C２類：体部はやや丸味を持って外傾し、口縁部は一度くびれて立ち上がり口縁端部で外反するものである。底部が現存するものでは丸底である。

D類：口縁が折り返すもので、頸部外面にハケメ調整を施すものである。

高坏

高坏は39点が図示できたが、全体の器形が分かるものは６点と少ない。坏部と裾部の特徴で以下の５類に分類し、脚部のみの資料に関しては不明な点が多く分類から除いたものもある。

A類：坏部底部が平底でありほぼ水平で角のつくものである。脚部は坏部との接合部から自然に裾部に向かってやや中ぶくらみで開いていき中空のものである。脚部内部にはケズリ調整が見られるが、一部しぼり目が残るものもある。裾部は大きく開き、端部はわずかにめくり上がる。

B類：坏部底部から口縁部まで直線的に外反するもので、口縁端部が内弯するものもある。底部と体部との境は緩やかで稜は明瞭ではない。脚部は自然に裾部に向かって開いていく。裾部がわかる資料は出土しなかった。

C類：坏部の体部に段を持つと考えられるものであるが、脚部以下は不明である。

D類：脚部が裾部に向かって自然に開き、裾部に段を持つものであるが、坏部は不明である。

E類：坏部から裾部に向かって円錐台形状に脚部が広がる資料であるが、坏部、裾部については不明である。

壷

壷は17点が図示できた。器高が10cm以下の小形のものと、口縁が複合口縁で大形のものがあり、それぞれ２類に細分される。

小形壷A類：体部が算盤形を呈し口縁部は直線的に外傾するもので、体部はきれいに整ったものとつぶれた形のものがある。底部は、平底と上げ底のものがある。

小形壷B類：体部の上位に最大径を持つ球形の体部に、短く外傾する口縁部を持つもので、底部は平底である。

大形壷A類：口径が16cm以上で、口縁を折り返し頸部にはハケメ調整を施すものである。全体の器形が分かるものはない。

大形壷B類：口縁に段を持つもので、口縁内部が凹状になるもので頸部にハケメ調整を施すものである。

甕

甕は17点が図示できた。体部の形状から以下の４類に分類される。

A類：球形の体部で、最大径をほぼ中央に持つものである。口縁部は「く」字状に屈曲し外反し、最大径が20cm以上の大形のものと20cm以下の小形のものがある。底部の形状は不明である。

B類：体部が長胴になり、最大径を口縁部に持ち、口縁部は「く」字状に屈曲し外反するものである。

C類：口縁部が短く外反するもので、底部の形状は不明である。

D類：体部は長胴で、最大径を体部中央に持つものと考えられる。口縁部はわずかに外反する。底部の形状は不明である（甑の可能性も考えられる）。

編年的位置

今回出土した古墳時代中期の土師器は、以上のように坏、高坏・小形壷・大形壷・甕からなり器形的特徴などから「南小泉式」に比定される。では、南小泉式のどの段階に位置するかについて丹羽氏の編年案（丹羽：1983）に基づいて検討するが、欠落器種も多いことから時間幅を持ったものであることを否めない。第4表に示した主な遺構毎の各器種、各類の出土状況を見るとある程度のまとまりが認められる。住居跡には器種の欠落が多いが、SD 5との間に共通性が強く窺え、主体をなす坏A・B 2類、高坏A・B類、甕A・B類の特徴などからB群土器（岩切鴻ノ巣遺跡1号住居など）段階からC群土器（台ノ上遺跡5号住居など）に位置するものと考えられる。SD17は、住居跡やSD 5と共通する傾向が見られるが、しかし、折り返し口縁で頸部にハケメ調整を施す坏D類や、頸部にハケメ調整を施し複合口縁の大形壷A類、体部が球形を呈し有段口縁の大形壷B類などが見られる。このような特徴は前期的な様相を示すものであり、住居跡やSD 5よりはやや古くなる可能性もか考えられる。また、SD17と似たような遺物の出土状況を示す遺構として第14次調査のSR01が考えられる。(第14次調査は、今回の調査地点から北に約50mのところに位置しており、SD17との関連性が考えられる。)SD17では分層できなかったが、SR01ではA群土器段階の層（3、4層）と、C群土器段階の土器を出土する層（1・2層）を分層している（佐藤：1987)。

2）石製模造品

石製模造品は、住居跡や溝跡を中心にして53点が出土している。特に、SI 5住居跡の柱穴底面からは千枚岩製の勾玉状石製模造品の未製品2点と、その製作過程において剥離されたと思われる剥片が一括して出土している。また、SD 5では、一括出土した土器の周囲から6点の石製模造品が出土し、さらに土壌水洗選別の結果2点の石製模造品が出土している。これらが土器内部に置かれていたのが流れ込んだものであるかについては確認できなかった。石材を見てみると、滑石製のものが全体の約1/4を占め、次いで安山岩、緑泥片岩がある。これら石材の産地としては、本遺跡の周辺に求められるものが多いが、滑石については関東地方に産地が求められるとの御教授を蟹沢教授からいただいている。滑石製のものの中には、比較的研磨の丁寧な作りのものが多く見られ、SI 5以外では製作に伴う剥片や未製品が見つかっていないことなどから、ここで製作されたものばかりではなく他の場所から完成品が持ち込まれた可能性も考えられよう。

2．遺構について

今回出土した遺構は、住居跡6棟、溝跡18条、土坑13基、井戸跡2基、小溝状遺構群、ピットなどである。これらの遺構からは弥生土器から中・近世の陶磁器が出土している。そのうち遺物の出土状況などから時期が判断できた遺構は次の通りである。

1）古墳時代中期（南小泉式）の竪穴住居、溝跡、土坑など……SI 1・2・3・4・5、SD 5・17、SK10・11
住居跡は遺物の検討からほぼ同時期であることが分かった。SI 3では、焼け面は確認されているもののカマドは検出されず、他の住居跡では全てカマドを持っている。

2）平安時代火山灰（十和田a）降下以前古墳時代遺構の小溝状遺構群
小溝状遺構群は、SI 2、SD 9・16と重複関係にあり、SI 2より新しくSD 9・16より古い。SD16には、堆積土中の10世紀前葉に降下した火山灰（十和田a）を含んでいるので、これよりは古いものである（第VI章火山灰分析参照）。

3）中世の溝跡……SD11
SD11は、時期を限定する遺物は出土しなかったが、隣接する本遺跡第5次・16次調査で検出されている13世紀後半頃の掘獄跡を区画する溝の一部である可能性が推定される。

3．まとめ

1）南小泉遺跡は、若林区遠見塚に位置し、広瀬川北岸に形成された自然堤防上に立地している。遺跡範囲は約

135haあまりの広大な遺跡で、そのうち第25次の調査である。

2）古墳時代中期の住居跡5棟、溝跡2条、土坑が確認された。溝跡を中心に住居跡などから、古墳時代中期南小泉式期の土師器が多く出土し、坏4類、高坏5類、壷4類、甕2類に分類できた。

3）火山灰（十和田a）降下以前の小溝状遺構群が確認された。

4）中世の屋敷地を区画する溝跡の一部と思われる溝が検出された。

今回調査の行われた25次調査の周辺では、5次・14次・16次調査と多くの調査が行われている。また、来年度はすぐ南側で調査が行われる予定であり、今回比較検討できなかった問題（14次調査で検出されている古墳時代中期の土器を出土する河川の連続性、16次調査で検出されている中世の溝で区画されている屋敷地の範囲など）の解明が期待される。

	坏							高坏					壷				甕			
SI－1		A2④			H2①												A①			
SI－2		A2②	A3②														A①	B①		D①
SI 3	A1①							H②												
SI－4								B①					小A②				A①			
SI－5																		D①		
SD－5	A1④	A2①	A3②	B2④				A④	H④		D①	K①	小A⑤		大A④		A①	H①	C①	
SD－17	A1④			H2②	C1①	C2①	D①	A④	B②	C①			小A②	小H③	大A③	大B①				

第4表　主な遺構毎の各器種・各類の出土数

参考文献

青寒俊典　1994　『山王遺跡Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第161集　宮城県教育委員会

阿部博志・千葉英久　1980　『台ノ上遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書11』宮城県文化財調査報告書第62集　宮城県教育委員会

阿部恵・須田良平・岩見和泰　1991　『新寒崎遺跡』宮城県村田町文化財調査報告書第9集　宮城県村田町教育委員会

岩見和泰他　1994　『藤山新山遺跡』宮城県文化財調査報告書第163集　宮城県教育委員会

氏家和典　1957　「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

加藤正範・結城慎一　1982　『南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第60集　仙台市教育委員会

金森安孝　1982　『南小泉遺跡第5次調査』　年報3　仙台市教育委員会

工藤哲司・荒井　格　1991　『南小泉遺跡第20次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第153集　仙台市教育委員会

佐藤　淳　1990　『南小泉遺跡－第19次調査報告書－』仙台市文化財報告書第141集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1985　『南小泉遺跡－第12次調査報告書－』仙台市文化財報告書第80集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1993　『下ノ内遺跡』仙台市文化財調査報告書第173集　仙台市教育委員会

佐藤　洋　1987　『南小泉遺跡第14次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第109集　仙台市教育委員会

白鳥良一・加藤道男　1974　『岩切鴻巣遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書－』宮城県文化財調査報告書第35集　宮城県教育委員会

須藤　隆　1985　「宝北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究1』考古学篇　清文堂

高倉敏明他　1981　『山王・高崎遺跡発掘調査概報』多賀城市文化財調査報告書第2集　多賀城市教育委員会

多賀城市史編纂委員会　1991　『多賀城市史4』多賀城市

丹羽　茂　1983　『宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集　宮城県教育委員会

結城慎一　1981　『南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第1次調査報告』仙台市文化財調査報告書第35集　仙台市教育委員会

結城慎一・工藤哲司　1982　『南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第2次調査報告』仙台市文化財調査報告書第52集　仙台市教育委員会

結城慎一・佐藤　洋　1984　『南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第3次調査報告』仙台市文化財調査報告書第68集　仙台市教育委員会

渡部弘美　1989　『南小泉遺跡－第15次調査報告書－』仙台市文化財報告書第131集　仙台市教育委員会

『南小泉遺跡範囲確認調査』仙台市文化財報告書第13集　仙台市教育委員会

渡辺　誠　1985　『南小泉遺跡－第13次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第81集　仙台市教育委員会

ＳＩ－１住居跡

図版番号	出土層位	種　別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	分類	写真図版
8－1	ＳＫ－７	土師器	坏	14.3	－	6.0	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラナデ	Ｂ２	5－4
8－2	ＳＫ－７	土師器	坏	15.5	4.0	6.5	ヨコナデ、不明	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	Ａ２	5－18
8　3	ＳＫ－７	土師器	鉢		7.6		ハケメ、ナデ	ヘラナデ、ハケメ、ナデ	Ａ	8－11
8－4	ＳＫ－７	須恵器	甕	－	－	－	平行タタキメ	ナデケシ		9－4

図版番号	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(ｇ)	石　材	特　徴	写真図版
8－5	1層	石製模造品	円板形	2.1	2.7	0.4	3.2	安山岩質凝灰岩	孔周溝1.6cm、側縁と片面に弱い研磨痕	10－22
8－6	1層	石製模造品	円板形	1.9	2.2	0.2	1.6	泥山岩質凝灰岩	孔開溝1.3cm、研磨痕は不明瞭	10－23
8－7	1層	石製模造品	臼玉	0.5	0.5	0.3	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11－3
8－8	1層	石製模造品	臼玉	0.5	0.5	0.25	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11－3
8－9	1層	石製模造品	臼玉	0.5	0.5	0.3	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11－3
8－10	6層	石製模造品	臼玉	0.5	0.5	0.3	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11－3
8－11	1層	石製模造品	臼玉	0.4	0.4	0.2	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11　3
8－12	6層	石製模造品	臼玉	0.45	0.45	0.25	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11－3
8－13	1層	石製模造品	臼玉	0.5	0.6	0.2	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11　3
8　14	1層	石製模造品	臼玉	0.5	0.5	0.2	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11－3
8－15	1層	石製模造品	臼玉	0.5	0.55	0.15	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11　3
8　16	1層	石製模造品	臼玉	0.5	0.5	0.2	0.1以下	滑石	孔径1.6mm	11－3
8－17	6層	石製模造品	臼玉	0.4	0.45	0.25	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11－3
8　18	1層	石製模造品	臼玉	0.45	0.45	0.2	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11－3

ＳＩ－２住居跡

図版番号	出土層位	器　別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	備　考	分類	写真図版
10　1	4層	土師器	坏	13.6	－	6.5	ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	カマド	Ａ３	5－10
10－2	2層	土師器	坏	13.0	－	6.7	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ	床面	Ａ３	5　5
10　3	2層	土師器	坏	14.2	－	6.7	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ	床面	Ａ２	5－7
10－4	2層	土師器	坏	14.0	－	9.9	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ		Ａ２	5　1
10　5	2層	土師器	鉢	(16.4)	－	－	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ナデ		Ｈ	－
10－6	2層	土師器	甕	－	(6.0)	－	ハケメ、ヘラミガキ、ハケメ	ヘラケズリ	床面	Ｂ	6　10
10　7	2層	土師器	鉢	(16.6)	－	－	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ		Ｄ	7－20
10－8	4層	土師器	甕	－	－	－	ヨコナデ、ハケメ、ナデ	ヨコナデ、ハケメ、ヘラナデ、ナデ		Ｂ	

図版番号	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(ｇ)	石材	特　徴	写真図版
10　9	2層	石錘		8.1	5.2	2.0	750	青灰色、両面に擦痕	12－9
10－10	2層	石製模造品	剣形	3.1	1.8	0.35	2.7	滑石	単孔　全面に研磨痕	10　9
10　11	2層	石製模造品	円板形	2.4	2.0	0.3	2.5	滑石	単孔　全面に研磨痕　一部欠損	10－27
10－12	2層	石製模造品	臼玉	0.4	0.4	0.3	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11　3
10　13	2層	石製模造品	臼玉	0.4	0.4	0.3	0.1以下	滑石	孔径1mm	11－3

ＳＩ－３住居跡

図版番号	出土層位	器　別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	備　考	分類	写真図版
12－1	1層	土師器	坏	12.8	－	4.0	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ？	床面	群1	8－12
12－2	1層	土師器	高坏	16.8	－	－	ヨコナデ、ハケメ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ハケメ	床面	Ｂ	6－5
12－3	1層	土師器	高坏	－	－	－	不明	不明	床面	Ｂ	－

図版番号	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(ｇ)	石　材	特　徴	写真図版
12－4	1層	すり石	(12.0)	(7.7)	(3.9)	(500)	安山岩質凝灰岩	3面に擦痕	12－16

ＳＩ－４住居跡

図版番号	出土層位	種　別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	備　考	分類	写真図版
14　1	2層	土師器	高坏	16.7	－	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラミガキ	床面	Ｂ	6－10
14－2	2層	土師器	高坏	－	－	－	ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ、ヨコナデ	シボリ目、ヘラナデ、ヨコナデ		Ｂ	6　18
14　3	ＳＫ－14	2層	土師器	壷	－	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ナデ		小Ａ	7－2
14－4	2層	土師器	甕	7.7	4.8	5.6	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	底面か？	小Ａ	7　1
14　5	2層	土師器	甕	7.0	－	－	ヨコナデ、ナデ	ヘラナデ、ヨコナデ、ヘラケズリ		Ａ２	－

図版番号	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(ｇ)	石　材	特　徴	写真図版
14－6	2層	石製模造品	円板形	3.3	3.4	0.4	5.0	安山岩質凝灰岩	側孔　孔周1.6cm　全面　研磨痕　一部剥離面残存	10　19
14　7	2層	石製模造品	臼玉	0.6	0.5	0.2	0.1以下	滑石	孔径1.5mm　一部欠損	11－3
14－8	2層	石製模造品	臼玉	0.65	0.7	0.3	0.1以下	滑石	孔径2.0mm	11　3
14－9	2層	石製模造品	臼玉	0.6	0.65	0.2	0.1以下	滑石	孔径2.0mm	11－3
14－10	2層	石製模造品	臼玉	0.5	0.5	0.2	0.1以下	滑石	孔径1.0mm	11－3
14－11	2層	石製模造品	臼玉	0.5	0.5	0.2	0.1以下	滑石	孔径1.5mm	11－3

第５表　遺物観察表 ①

ＳＩ－５住居跡（北区）

図版番号	出土層位	種別	形態	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	分類	写真図版
16－1	1層	土師器	甕	15.6	－	－	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ハケメ、ヘラナデ、ヘラミガキ	B	8－2
16－2	1層	須恵器	壺				平行タタキ目、ナデ	指オサエ		9－2

図版番号	出土層位(遺構)	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	特徴	写真図版
16－3	1層	石製品　すり石	10.3	9.1	6.0	790	安山岩	全面研磨	12－13
16　4	Pit 1	円板形石製模造品　未製品	(1.2)	1.5	0.15	0.3	千枚岩	片面研磨	11　2
16－5	Pit 1	円板形石製模造品　未製品	2.3	(1.8)	0.35	2.4	千枚岩	両面研磨	11－2
16－6	Pit 1	円板形石製模造品　未製品	(2.9)	(1.6)	(0.2)	1.0	千枚岩	片面に置い研磨痕	11－2
16－7	Pit 1	勾玉形石製模造品　未製品	(2.9)	0.8	0.3	1.4	千枚岩	片面・内側縁に研磨痕	11－2
16－8	Pit 1	勾玉形石製模造品　未製品	(2.4)	0.7	0.3	0.7	千枚岩	片面・内側縁に研磨痕	11－2

ＳＩ－６住居跡（北区）

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	写真図版
18－1	1層	土師器	坏	12.0	－	－	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ、ヘラナデ	－

図版番号	出土層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	特徴	写真図版
18　2	4層	すり石	17.1	15.7	4.5	1935		両面に磨痕	12　18
18－3	ＳＫ－12　1層	石製模造品　勾玉	3.0	1.9	0.7	5.1	蛇石	単孔　孔径1.5mm　全面研磨痕	10－39

ＳＩ－７竪穴遺構（北区）

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	分類	写真図版
20－1	1層	土師器	甕	(18.0)	－		ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、ヘラナデ	B	－

ＳＤ－１溝跡

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	分類	写真図版
26－1	1層	土師器	坏	－			ヨコナデ	ヨコナデ	C１	－

図版番号	出土層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	特徴	写真図版
26－2	1層	剥形　石製模造品	2.8	1.9	0.45	3.4	安山岩質凝灰岩	単孔　孔径2mm　左側辺に研磨痕	10－14

ＳＤ－２溝跡

図版番号	出土層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	特徴	写真図版
26－3	1層	すり石	7.3	6.6	5.0	340	安山岩質凝灰岩	2面に磨痕	12－14

ＳＤ－５溝跡

図版番号	出土層位	種別	番種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	分類	写真図版
27－1	1層	No.34	土師器	坏	13.8	－	6.5	ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	A 2	5－11
27　2	1層	No.26	土師器	坏	15.8	－	5.0	ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	B 2	5　15
27－3	1層		土師器	坏	14.3	5.1	6.2	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ、ヘラミガキ	A 3	5－9
27－4	1層		土師器	坏	14.2	4.4	6.2	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	A 3	5－17
27－5	1層		土師器	坏	(13.4)	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	A 1	－
27－6	1層		土師器	坏	15.2	3.5	4.4	ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ	ヨコナデ	B 2	5－16
27－7	1層	No.17	土師器	坏	15.0	－	5.2	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ、ナデ	ナデ、ヘラミガキ	B 2	5－13
27－8	1層	No.25	土師器	坏	14.2	－	6.5	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラミガキ	B 2	6－8
27　9	1層		土師器	坏	(15.0)	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	A1	－
27－10	1層		土師器	高坏	21.3	15.4	16.1	ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ、ナデ	A	6－1
27　11	1層		土師器	高坏	20.2	15.2	14.9	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	A	5　24
27－12	1層	No.26	土師器	高坏	20.7	14.4	15.3	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	A	6－2
27－13	1層		土師器	高坏	21.4	16.4	16.6	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデケズ、ナデ、ヘラケズリ	A	5　25
27－14	1層	No.26	土師器	高坏	21.4	17.2	17.2	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ、ヘラナデ	A	5－23
27－15	1層		土師器	高坏	19.7	15.6	16.6	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ、ナデ	A	6－3
28　1	1層	No.3	土師器	高坏	22.0	－	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	－	6－6
28－2	1層	No.29	土師器	高坏	21.7	－	－	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	B	6－4
28－3	1層		土師器	高坏	21.0	－	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	A	6－8
28－4	1層	No.13	土師器	高坏	19.5	－	－	ヨコナデ、ナデ、	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ	－	
28－5	2層		土師器	高坏	18.6	－	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ	B	6　9
28－6	1層	No.30	土師器	高坏	19.0	－	－	ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	H	6－7
28－7	2層		土師器	高坏	－			ナデ、ヨコナデ	シボリ目、ヨコナデ	A	6－19
28　8	1層	No.31	土師器	高坏	－	－	－	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヘラケズリ、ヘラナデ、ヨコナデ、ナデ	E	－
28－9	1層	No.14	土師器	高坏		22.0	－	ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ、ヨコナデ	ヘラケズリ、ナデ、ヘラミガキ、ヨコナデ	D	6－17
28－10	1層		土師器	高坏	－	14.0	－	ナデ、ヘラミガキ、ヨコナデ	シボリ目、ナデ、ヨコナデ	A	6－15
28－11	1層		土師器	高坏	－	－	－	ヘラケズリ？	シボリ口	－	6－22
28－12	1層		土師器	高坏	－			ヘラケズリ	シボリ目、ナデ		6　28
28　13	2層		土師器	高坏	－	－	－	ナデ？	シボリ目、ヘラケズリ、ナデ	－	6－20
28－14	1層	No.5	土師器	高坏	－	－	－	ナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ、ヘラケズリ	E	6－23
28－15	1層	No.4	土師器	高坏	－	－	－	ナデ、ヘラミガキ	シボリ目、ナデ	E	6－16
28－16	1層		土師器	鉢	－	5.4	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	A A	7－3

第６表　遺物観察表 ②

ＳＤ－５溝跡

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	分類	写真図版
28－17	1層	土師器	盌	－	3.6	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ	小A	7－4
28－18	1層	土師器	甕		4.4	－	ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ	小A	7－7
28－19	1層	土師器	鉢	－	4.0		ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	7－17
28－20	1層 No.30	土師器	甕	(18.0)	－	－	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	大A	－
28－21	1層 No.29	土師器	甕	(18.0)	－		ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	大A	－
29－1	1層 No.32	土師器	甕	16.6	－	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ	A1	7－19
29－2	1層 No.27	土師器	甕	17.4	－		ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ、ヨコナデ、ハケメ（粗）	A1	7－18
29－3	1層 No.11	土師器	甕	19.2	－	－	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ、ヘラケズリ	A1	8－5
29－4	1層	土師器	甕	(17.4)	－		ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	C－	8－7
29－5	1層	土師器	甕	(20.4)	－	－	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラナデ	A1	8－4
29－6	1層	土師器	甕	－	6.8	－	ヨコナデ、ナデ、剥落のため不明	ヨコナデ、ヘラナデ	B	8－3
29－7	1層 No.31	土師器	甕	(20.4)	－	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	A1	－
29－8	1層 No.31,2	土師器	甕	(20.0)		－	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	A1	－
30－1	1層	土師器	甕	－	5.0	－	ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラケズリ	A1	8－1

図版番号	出土層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	特徴	写真図版
30－2	1層	すり石	(9.9)	7.5	3.8	350	安山岩	3面に擦痕	12－19
30－3	1層	剣形 石製模造品	5.5	2.4	0.5	11.0	滑石	単孔 孔幅1.5mm 全面研磨 一部欠損	10－6
30－4	1層	剣形 石製模造品	5.3	2.2	0.65	8.0	滑石	孔幅1.5mm 一部剥離痕残存全面研磨	10－7
30－5	2層	剣形 石製模造品	5.4	2.75	0.8	15	滑石	単孔 全面研磨 一部欠損	10－8
30－6	1層	円板形石製模造品	4.2	4.1	0.4	8.0	安山岩質凝灰岩	単孔 孔幅1.5mm 全面研磨	10－24
30－7	1層	石製模造品 臼玉	0.5	0.5	0.2	0.1	滑石	孔幅1.2mm	11－3
30－8	1層	石製模造品 臼玉	0.5	0.5	0.3	0.1以下	滑石	孔幅1.2mm	11－3

ＳＤ－９溝跡

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	写真図版
26－4	2層	土師器	坏	(15.2)	(6.0)	5.5	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	8－16

ＳＤ－10溝跡

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	分類	写真図版
26－5	1層	土師器	高坏	－	－		ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ		－

ＳＤ－13溝跡（北区）

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	分類	写真図版
26－7	4層	土師器	坏	10.6	－	4.0	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、放射状ヘラミガキ	B2	－
26－8	4層	土師器	坏	5.2	－		ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ナデ、放射状ヘラミガキ	C2	－
26－9	4層	土師器	坏	(15.0)	－	－	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラミガキ	A2	5－20
26－10	4層	土師器	坏	10.6	－	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	B2	－
26－11	6層	土師器	高坏	(18.4)	－	－	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ	－	－
26－12	6層	土師器	甕	(10.0)	－		ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ	－	－
26－13	4層	土師器	甕	(14.0)	－	－	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	A2	8－9
26－14	5層	須恵器	甕	(21.4)	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	－	9－3

図版番号	出土層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	特徴	写真図版
26－15	北区 1層	すり石	(11.9)	(7.7)	(3.9)	250	安山岩質凝灰岩		12－17
26－16	1層	勾玉形 石製模造品	2.9	1.4	0.35	2.1	滑石	単孔 孔幅1.2mm 全面研磨	10－29
26－17	2層	円板形石製模造品	2.7	2.8	0.25	2.7	安山岩質凝灰岩	単孔 孔幅1.0mm 全面研磨 一部欠損	10－28

ＳＤ－14溝跡（北区）

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	分類	写真図版
26－6	1層	土師器	坏	(12.2)	－	－	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、放射状ヘラミガキ	E1	－

ＳＤ－17溝跡

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	分類	写真図版
31－1	16層	土師器	坏	15.0	4.2	10.4	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ナデ、ヘラナデ	A1	5－3
31－2	4層	土師器	坏	16.2	－	3.7	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ	B2	5－22
31－3	2層	土師器	坏	11.0	－		ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ	ヨコナデ、ヘラミガキ	B2	5－19
31－4	16層	土師器	坏	15.8	－	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、内面モミ圧痕	C1	－
31－5	4層	土師器	坏	(15.0)	－		ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラミガキ	B2	－
31－6	4層	土師器	坏	15.1	－	－	ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	D	5－2
31－7	4層	土師器	坏？	(15.8)	－		ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケメ	－	－
31－8	16層	土師器	高坏	24.0	－	－	ヘラミガキ、ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	C	6－12
31－9	16層	土師器	高坏	－	15.2		ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヘラナデ、ヨコナデ	A	6－21
31－10	2層	土師器	高坏	18.9	－	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデツケ、ヘラケズリ、シボリ目	B	6－11
31－11	2層	土師器	高坏	(19.6)	－		ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	B	6－14
31－12	16層	土師器	高坏		－	－	ヘラケズリ、ヘラミガキ	ナデツケ	－	6－27

第７表　遺物観察表 ③

ＳＤ－17遺跡

図版番号	出土層位	用　別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	分類	写真図版
31　13	4層	土師器	高坏	－	－	－	ナデ、ヘラミガキ	シボリ目	－	6－23
31－14	4層	土師器	高坏	－	－	－	ナデ、ヘラミガキ	シボリ目、ナデ	－	6－24
31－15	2層	土師器	高坏	－	15.6	－	ヘラミガキ、ナデ	ナデ、ヨコナデ、ヘラミガキ	A	6　26
31－16	4層	土師器	高坏	－	－	－	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ナデ	－	6－31
31－17	4層	土師器	高坏	－	－	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ、シボリ目、ナデツケ、ナデ		6　32
31－18	4層	土師器	高坏	－	－	－	ヘラケズリ、ヘラミガキ	シボリ目、ナデツケ、ヘラナデ	A	6－29
31－19	4層	土師器	壺	－	2.6	－	ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ナデ	小A	7　8
31－20	4層	土師器	甕	9.7	3.8	9.2	ヨコナデ、ハケ、ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ナデ	小A	7－6
31－21	1b	土師器	壺	7.3	2.6	9.9	ヨコナデ、ハケメ、ナデ 体部下半に外側からの穿孔あり（焼成後）	ヨコナデ、ヘラナデ	小B	7－9
31　22	4層	土師器	壺	－	4.2	－	ヨコナデ、ハケメ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	小B	7　5
31－23	1層	土師器	甕		4.0		ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	シボリ目、ナデ	小H	7－12
31　24	2層	土師器	壺	20.4	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	大A	－
31－25	2層	土師器	甕	16.4			ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケメ、ナデ、ヘラケズリ	大A	7－15
32　1	2層	土師器	壺	26.0	10.0	63.5	ヨコナデ、ハケメ、ヘラミガキ	ヘラナデ	大B	7　16
32－2	2層	土師器	甕	16.6			ハケメ、ヨコナデ、ヘラミガキ	ハケメ、ヨコナデ、ヘラミガキ	大A	7－16

図版番号	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	特　徴	写真図版
32　3	4層	すり石	(8.0)	(6.4)	(2.3)	(90)	－	片面に磨い擦痕	12　10
32－4	4層	土玉	3.1	3.1	3.1	－	0.5	ナデ	10－5
32－5	4層	土玉	3.4	3.2	3.1	－	0.6	ナデ、ヘラミガキ	10－5

図版番号	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　材	特　徴	写真図版
32－6	2層	剥形　石製模造品	3.7	2.0	0.45	4.4	安山岩質凝灰岩	単孔　孔縁1.5mm　全面研磨	10－9
32－7	2層	剥形　石製模造品	3.8	1.3	0.3	3.6	滑石	単孔　孔縁1.0mm　全面研磨　一部剥離痕残存	10－11
32－8	2層	円板形　石製模造品	3.9	4.3	0.5	12.4	安山岩質凝灰岩	複孔　孔縁2.7cm　全面研磨	10－18
32－9	2層	剥形　石製模造品	3.2	1.1	0.25	1.6	安山岩質凝灰岩	単孔　孔縁1.5mm　全面研磨　一部欠損	10－13
32－10	4層	剥形　石製模造品	2.9	2.0	0.35	3.4	滑石	単孔　孔縁2.0mm　全面研磨　一部剥離痕残存	10－15
32－11	2層	剥形　石製模造品	3.2	2.0	0.4	6.3	滑石	単孔　孔縁1.5mm　全面研磨　一部欠損	10－17
32－12	2層	剥形　石製模造品	2.5	1.8	0.4	2.9	滑石	単孔　孔縁1.5mm　全面研磨　一部欠損	10－16

ＳＤ－18遺跡

図版番号	出土層位	種　別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	分類	写真図版
26　18	2層	土師器	高坏	－	－	－	不明	ナデツケ、ヘラケズリ、ヘラナデ	－	6－30
26－19	2層	弥生器	不明	(10.2)	－	－	櫛描き波状	ロクロナデ	－	8－17

図版番号	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　材	特　徴	写真図版
26　20	2層	すり石	9.6	5.6	3.8	310	安山岩質凝灰岩	2面に擦痕	12－15
26－21	2層	円板形　石製模造品	2.4	3.5	0.3	4.8	緑泥片岩	孤孔　孔縁2.7cm　全面研磨痕	10－21
26　22	1層	剥形　石製模造品	3.6	1.2	0.3	1.9	滑石	単孔　孔縁1mm　全面研磨痕	10－12

小溝遺構群

図版番号	出土層位	種　別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	分類	写真図版
34－1	1層	土師器	坏	14.6	－	6.1	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ	C 2	5－21
34－2	1層	土師器	坏	(15.0)			ロクロナデ、ハケメ	ヨコナデ、ヘラミガキ	C 2	
34－3	1層	土師器	壺	－	3.0	－	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ナデ、ヘラナデ	小A	7－13

図版番号	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	特　徴	写真図版
34	1層	すり石	(9.3)	5.8	5.5	(350)	安山岩	片面に擦痕	12　11

ＳＫ－３土坑

図版番号	出土層位	種　別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	写真図版
35－1	1層	赤焼土器	坏	11.7	4.3	3.7	ロクロナデ、底部口転糸切り痕し	ロクロナデ	8－15

図版番号	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	特　徴	写真図版
35－2	1層	石製模造品　臼玉	0.5	0.5	0.3	0.1以下	滑石	単孔　孔縁1.5mm	11－3

ＳＫ－５土坑

図版番号	出土層位	種　別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外　面	内　面	写真図版
35－3	1層	須恵器	坏	15.0	6.0	4.9	ロクロナデ、底部回転糸切り無調整	ロクロナデ	9　1
35－4	1層	土師器	坏	－	5.0	－	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	8－18

第８表　遺物観察表 ④

ＳＫ－６土坑

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	写真図版
35－5	4層	土師器	坏	−	(5.2)	−	ロクロナデ、底部回転糸切り無調整	ヘラミガキ、黒色処理	−

ＳＫ－９土坑

図版番号	出土層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	特徴	写真図版
35－6		石製模造品　勾玉	3.3	2.3	0.9	8.9	滑石	単孔　全面研磨痕　上部欠損	10－31

ＳＫ－10土坑（北区）

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	胴径(cm)	器高(cm)	外面	内面	分類	写真図版
35－7	1層	土師器	坏	14.0	−	5.0	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ、ヘラミガキ	B2	5－12
35－8	1層	土師器	坏	13.6	−	5.5	ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	B1	−
35－9	1層	土師器	高坏	16.0	−	−	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ、ナデツケ	B	6－13

ＳＫ－11土坑（北区）

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	胴径(cm)	器高(cm)	外面	内面	分類	写真図版
35－10	1層	土師器	坏	14.6	−	4.6	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ	B2	5－6

ＳＫ－13土坑（北区）

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	写真図版
35－11	1層	土師器	甕	(17.8)	−	−	ロクロナデ	ロクロナデ	8－17

基本層出土遺物

図版番号	出土層位	種別	器種	口径(cm)	胴径(cm)	器高(cm)	外面	内面	分類	写真図版
42－1	II層	土師器	坏	15.0	−	4.9	ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	B1	5－14
42－2	II層	土師器	壺	−	−	−	ヨコナデ、ハケメ、ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヨコナデ、シボリ目、ナデ	小A	7－11

図版番号	出土層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	特徴	写真図版
42－4	⑥	円板形　石製模造品	2.6	2.8	0.4	6.0	滑石	複孔　孔間1.2cm　全面研磨　一部剥離面	10－20
42－5	⑦	円板形　石製模造品	2.1	2.1	0.3	2.5	緑泥片岩	複孔　孔間8mm　全面研磨	10－25
42－6	⑦	円板形　石製模造品	2.0	1.9	0.25	1.8	緑泥片岩	複孔　孔間1.2cm　全面研磨	10－26
42－7	北区　III層	石製模造品　管玉	2.9	0.5	0.5	1.3	滑石		10－32
42－3	北区　III層		12.3	7.3	5.1	685	[illegible]		12－15

各地区出土遺物

図版番号	出土層位遺構	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	特徴	写真図版
44－5	SK2　1層	石鏃	2.2	1.1	0.5	1.3	流紋岩	基部が直線上で、全面に二次加工が施され、素材面が残らない	11－7
44－6	P40	石鏃？	(2.0)	1.0	0.5	0.9	玉髄	基部欠損 全面に二次加工が施され、素材面が残らない	11－6
44－7	SD2　4層	石鏃	2.6	1.4	1.0	2.7	流紋岩	自然面を一部に残す	11－8
44－8	SK2　1層	剥片石器	(3.5)	1.9	0.6	3.5	凝灰岩	両側辺に片側から連続した二次加工、上部欠損	11－5
44－10	SI2　4層	剥片石器	(2.8)	2.9	1.1	5.8	凝灰質粘板岩	両端欠損　両側縁に二次加工	11－10
44－11	①	ピエス　エスキーユ	2.6	3.5	0.7	7.2	流紋岩	二縁辺に両極剥離痕	12－5
44－9	①	ピエス、エスキーユ	2.0	1.2	0.8	1.7	玉髄	二縁辺に両極剥離痕	11－9
44－13	②	二次加工のある剥片	(5.4)	7.3	1.7	65.5	流紋岩	打面部分欠損 一縁辺に二次加工	12－2
44－15	1層	二次加工のある剥片	3.0	3.5	1.6	12.6	流紋岩	一縁辺に二次加工	12－3
45－1	②	二次加工のある剥片	4.5	4.1	1.6	26.2	流紋岩	一縁辺に二次加工	12－4
45－2	P25	二次加工のある剥片	2.2	3.3	0.7	2.4	凝灰岩	二縁辺に二次加工	12－8
44－12	②	微細剥離痕のある剥片	2.9	2.1	0.8	2.5	流紋岩	一縁辺にまばらに微細剥離痕	12－7
45－4	⑤	微細剥離痕のある剥片	6.0	3.2	1.1	20.0	流紋岩	両縁辺にまばらに微細剥離痕	12－6

各地区出土遺物

図版番号	出土層位遺構	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	特徴	写真図版
45－3	SD2　4層	微細剥離痕のある剥片	2.7	3.9	0.9	6.9	流紋岩	一縁辺に大きめの剥離痕	11－13
45－4	P117	微細剥離痕のある剥片	3.5	3.2	0.6	5.6	流紋岩	二ケ所に微細剥離痕	11－17
45－5	②	微細剥離痕のある剥片	5.1	5.1	5.1	24.4	流紋岩	二縁辺に微細剥離痕	11－15
45－6	②	微細剥離痕のある剥片	6.2	4.8	1.4	27.8	流紋岩	一縁辺に微細剥離痕	11－11
45－7	①	微細剥離痕のある剥片	3.1	3.0	1.3	7.2	流紋岩	一縁辺に微細剥離痕	11－14
45－9	⑧	微細剥離痕のある剥片	4.7	4.0	1.5	25.6	流紋岩	一縁辺に連続した微細剥離痕	11－4
45－8	⑧	微細剥離痕のある剥片	6.0	3.2	1.6	19.0	流紋岩	一部に微細剥離痕	11－12
45－10	⑨	微細剥離痕のある剥片	(3.6)	3.1	2.4	17.8	流紋岩	一部欠損　一縁辺に連続した微細剥離痕	11－16
22	①	大型直線刃石器	11.7	15.7	2.2	470	粘板岩	両面に研磨痕、片面の所々に樹脂状の付着物	12－1

第９表　遺物観察表 ⑤

各地区出土遺物

図版番号	出土層位遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	写真図版
43－1	⑤	弥生土器	甕	-	-	-	内面ヘラケズリ、ナデ、内面1条外面7条の2本同時施文具による波状文が描かれている	10－14
43－2	⑤	弥生土器	甕	(26.2)	-	-	外面斜行縄文LR（半裁）　内面ナデ、ヘラミガキ	10－1
43－3	SI2　5層	弥生土器	壺	(22.4)			被合口壺　底部すると口縁部と口縁部頸部に施紋（R）施文　その後その口縁部下端に指頭の押圧を連続して加えている　外面ヘラナデ、ナデ　内面ヘラナデ	7－13
43　4	⑤	弥生土器	壺	-	6.4	-	外面底部立ち上がりナデ　内面ヘラナデ？　底部木葉痕	10－3
43－5	P55	弥生土器	鉢？	-	-	-	外面LR（斜行縄文）施文後に沈線スリ消しヘラ描き　内面ヘラミガキ（前期後～中期前葉）	9－5
43　6	SD18　1層	弥生土器	鉢	-	-	-	外面縄文LR　施文後ヘラ描き　沈線　スリ消し　内面ナデ　1条の沈線	9－6
43－7	P56	弥生土器	壺？	-	-	-	外面斜行縄文LR　施文後にヘラ描き沈線　内面ナデ	9－7

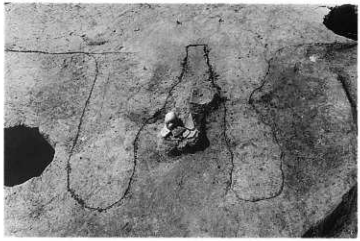
各地区出土遺物

図版番号	出土層位遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	写真図版
43－8	SD2　1層	弥生土器	甕	-	-	-	外面縄沈線により2本単位の文様が描かれる　内面ヘラミガキ	9－11
43－11	SD2　1層	弥生土器	鉢	-	-	-	外面沈線2本　無節R？　内面ヘラミガキ	9－12
43－9	①	弥生土器	不明	-	-	-	外面ナデ　2本1単位平行沈線　内面　2本同時平行沈線山形文	9－9
43－12	③	弥生土器	壺				外面　3本同時平行沈線波文　内面ナデ	9－13
43－13	小溝群	弥生土器	不明	-	-	-	外面　3本同時平行沈線山形文？　内面ナデ	9－10
43－14	P55	弥生土器	壺	-	-	-	地文LR外面ナデ　無節に4段の縦施文が認められる　焼成後の孔あり（補修孔か？）内面ナデ	9－14
43－10	P31	弥生土器	甕	-	-	-	地文LR　外面ナデ　胴部に3段の縦網文(横方向施文)が施されている　内面ナデ	-
43　15	②	弥生土器	不明	-	8.2	-	外面縄文LR　内面ナデ	-
43－18	SK2　1層	弥生土器	壺	-	3	-	外面縄文LR　頸部　底部が凹状になっている	
43－19	⑥	弥生土器	壺	-	-	-	外面斜行縄文LR　内面ナデ	-
43－16	SK6　4層	弥生土器	不明	-	-	-	外面斜行縄文LR　内面ヘラミガキ	
43－17	⑤	弥生土器	壺	-	-	-	外面ナデ　内面縄文LR	9－23
44－1	⑤	弥生土器	壺	-	-	-	外面底部R　弓置ナデ　スス状炭化物付着	9－18
44－2	⑥	弥生土器	壺	-	-	-	外面底部R　弓張ヘラケズリ、ヘラミガキ	9－16
44－3	⑤	弥生土器	壺				外面底部R　六置ナデ　スス状炭化物付着	9－17
44－4	⑥	弥生土器	壺	-	-	-	外面底部R　六置ナデ	9－19

第10表　遺物観察表 ⑤

写真図版

1．ＳＩ１床面検出状況



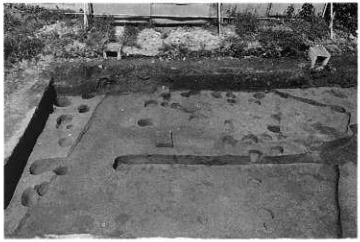
2．ＳＩ１カマド検出状況

3．ＳＫ７遺物出土状況

4．ＳＩ２完掘状況

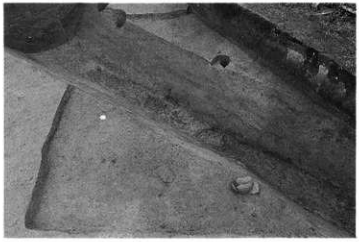
写真図版１　検出遺構１

1．ＳＩ２カマド検出状況



2．ＳＩ４完掘状況

3．北区遺構検出状況



4．ＳＩ５完掘状況

写真図版２　検出遺構２

1．ＳＩ６完掘状況

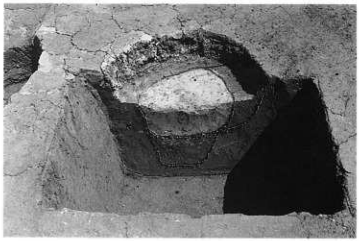
2．ＳＤ５遺物出土状況①

3．ＳＤ５遺物出土状況②

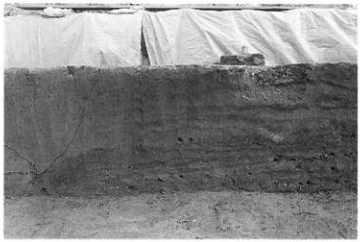
4．ＳＤ17遺物出土状況

写真図版３　検出遺構３

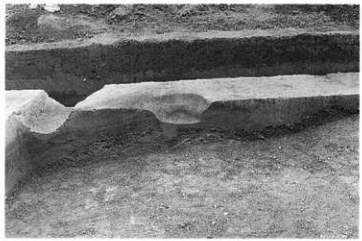
1．小溝状遺構群完掘状況



2．ピット63断面

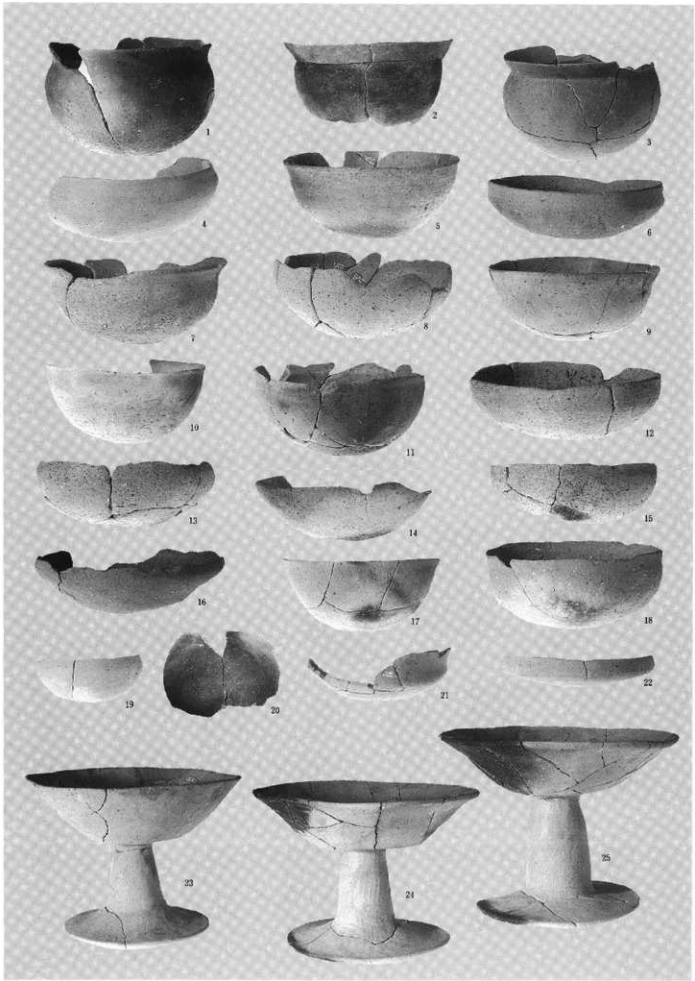


3．南区南壁



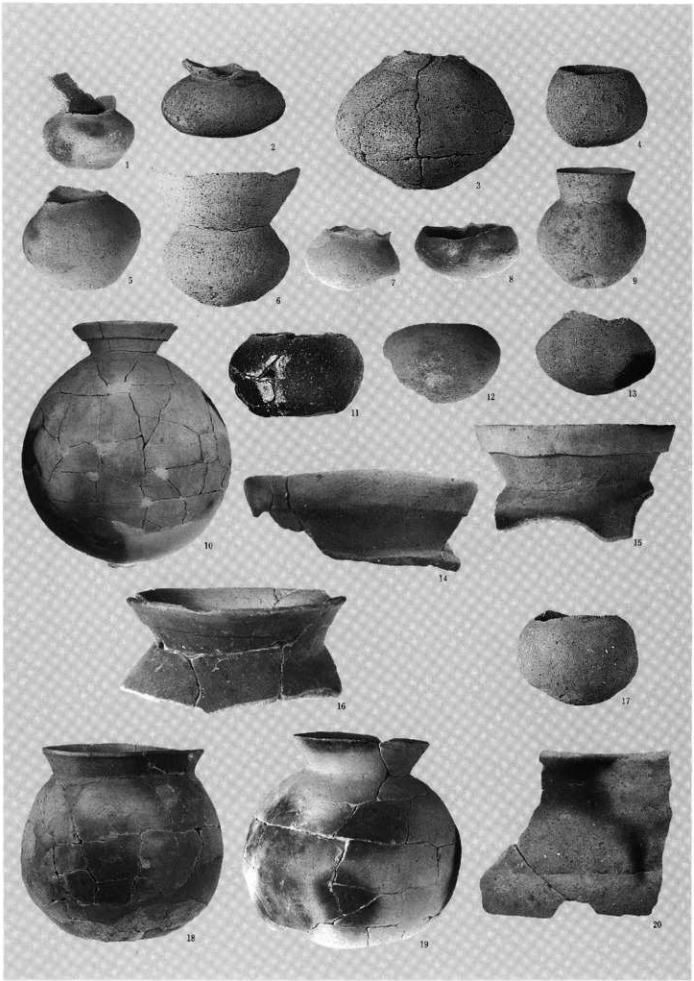
4．南区南壁

写真図版4　検出遺構4

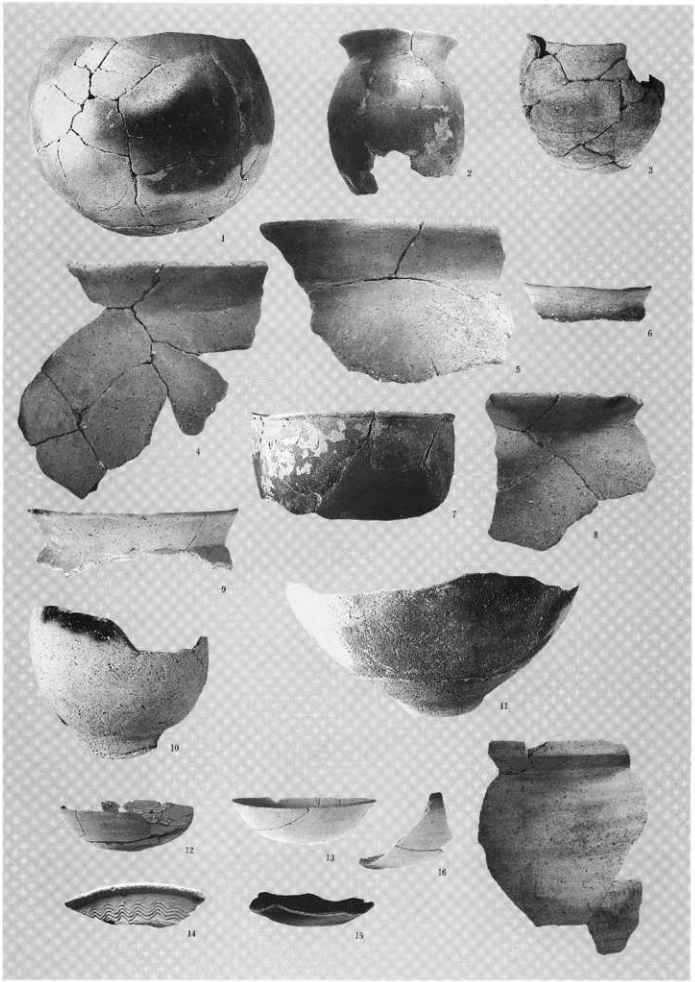


写真図版5　土師器①

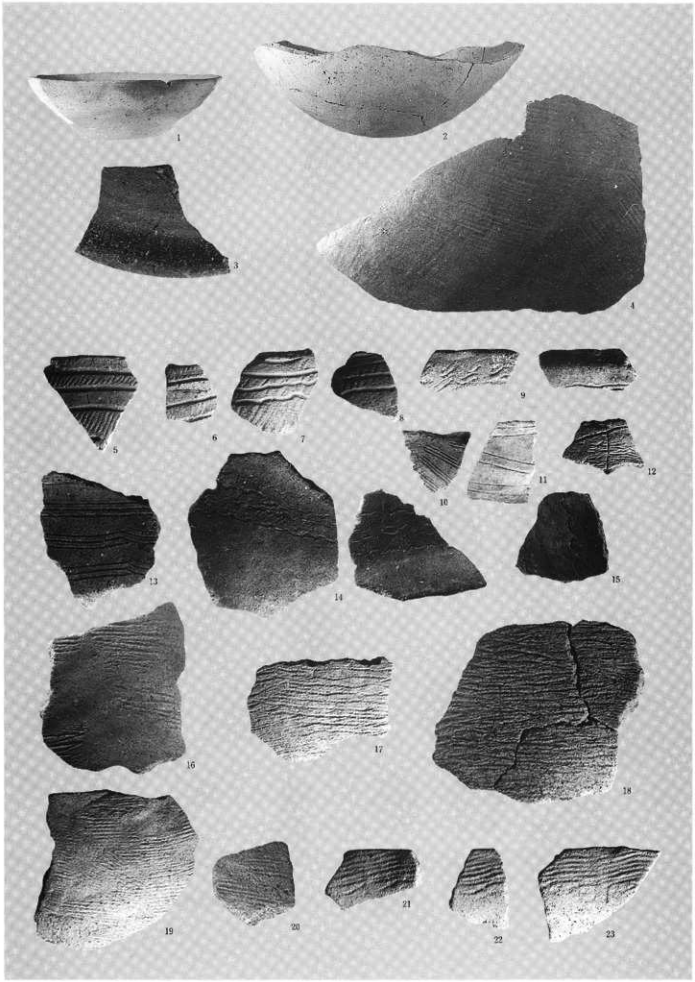
写真図版6　土師器②



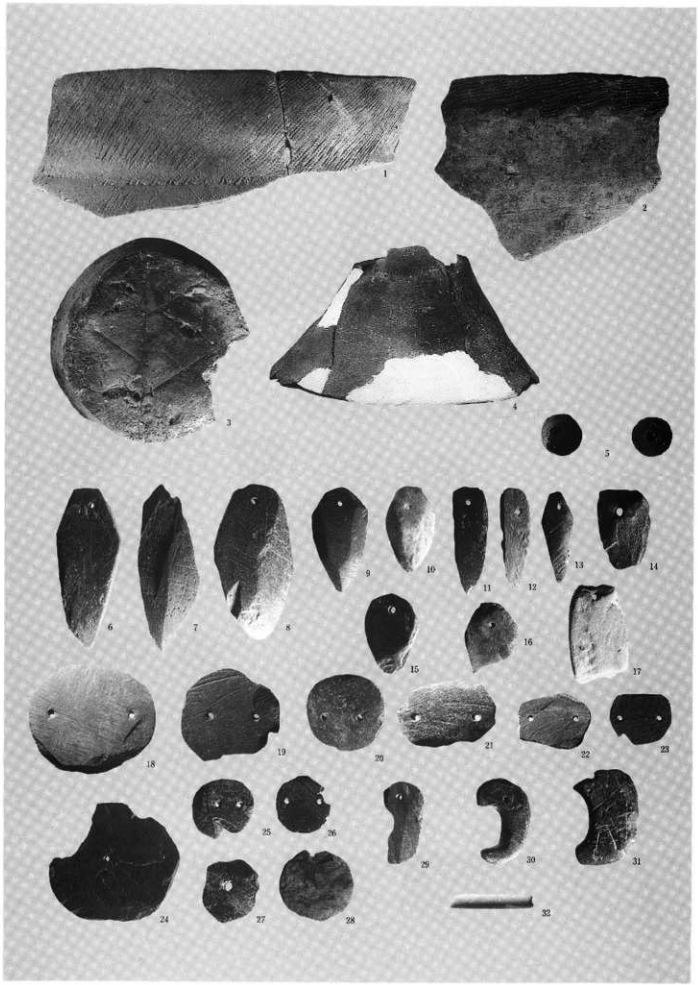
写真図版7　土師器③



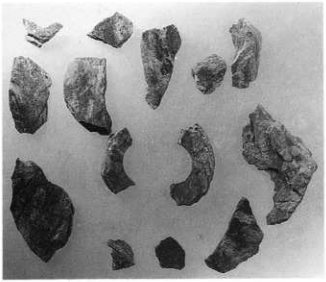
写真図版 8　土師器④

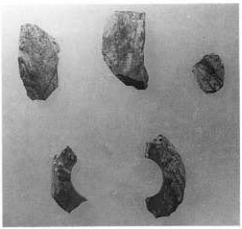


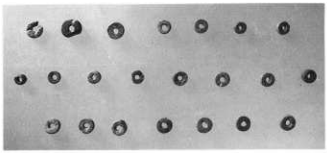
写真図版9　土師器⑤・須恵器・弥生土器①

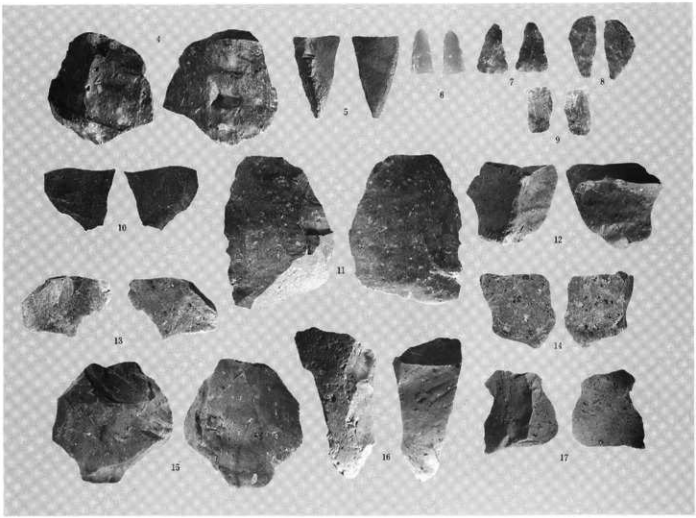


写真図版10　弥生土器②・土製品・石製品①



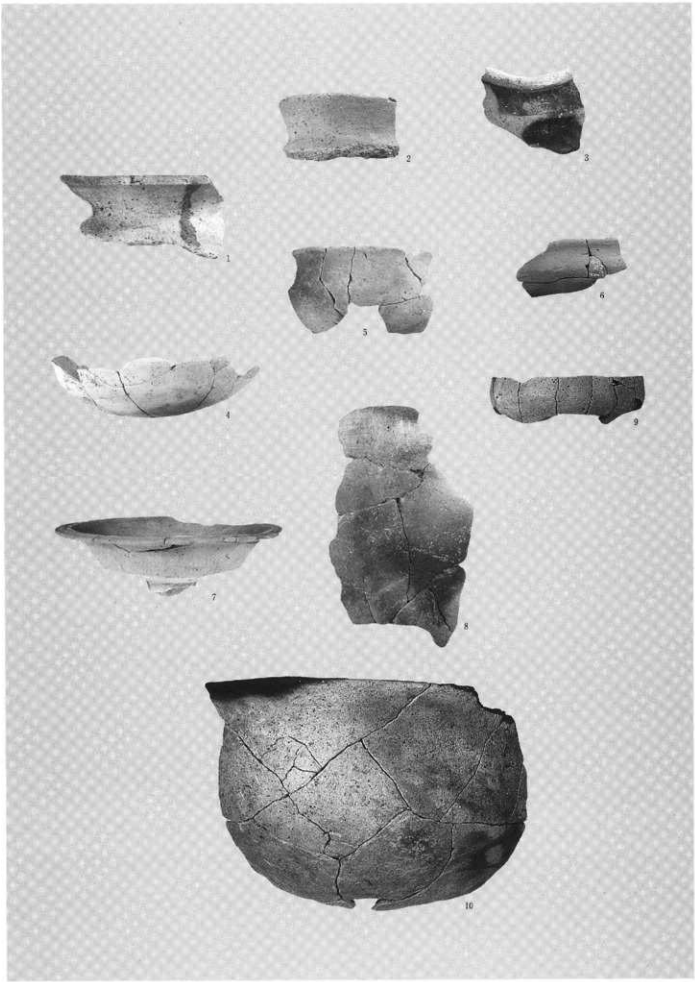






写真図版11　石器・石製品②

写真図版12　石器・石製品③



写真図版13　24次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みなみこいずみいせき
書名	南小泉遺跡
副書名	第25次調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第196集
編著者名	五十嵐 康洋
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	仙台市青葉区国分町三丁目7－1
発行年月日	平成7年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
みなみこいずみいせき 南小泉遺跡	せんだいしわかばやしく 仙台市若林区 とおみやちょういちちょうめ 遠見塚一丁目 22他	041009	01021	38° 14′ 03″	140° 54′ 46″	平成6年4月13日 ～ 平成6年7月20日	約1,000㎡	公共施設等建設による道路部分の調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南小泉遺跡	集落跡・畠跡	古墳時代	住居跡・溝跡	弥生土器・土師器・須恵器・石器・石製模造品	

仙台市文化財調査報告書第196集

南小泉遺跡

―第25次調査報告書―

1995年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課 022(261)1111

印刷　株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24－24
TEL 263-1166